

どこでもドアのかぎ

2022

生協 25 周年記念号

特集：アツい本



生協は 25 周年を迎えました。

なぜ新潟県立大学よりも歴史が長いのかというと、かつてこの場所にあった「県立新潟女子短期大学」の生協として誕生したからです。25 年前、現キャンパスの周辺は、飲食店は今よりももっと少なく、コンビニもなく、不便で寂しい場所でした。本や文房具、講義の合間にちょっとおやつ、などの買い物ができる場所がほしい！という熱い思いを結集して、みんなで作った生協でした。

2009 年、新潟県立大学が開学し、その数年後に「ぱれっと」が完成したことで、生協は新しい歴史を歩み始めることになりましたが、学生と教職員のいちばん近くにいて、その生活を豊かにするお手伝いをする、という役割を、これからも果たしていきたいと思います。

節目の年にもかかわらず、コロナ禍ゆえにお祝いの行事などを行うこともできませんでしたので、せめてもの記念に、「どこでもドアのかぎ」にこれまでに掲載された推薦書を、すべて集めてみました。すると、その数は、今号の分も加えると 1000 冊を超えることがわかりました。そして、そのうちのおよそ 2 割が、生協の生みの親のひとりであり、のちに理事長も務められ、そしてこの 3 月で定年退職を迎えられる、石川伊織先生のご推薦でした！創刊号から、毎回欠かさず、たくさんのアツい推薦文を寄稿してくださった石川先生はじめ、すべての寄稿者のみなさまに、改めて御礼申し上げます。

新潟県立大学生生活協同組合 教職員フォーラム

どこでもドアのかぎ 2022 目次

山田 佳子	(国際地域学部 国際地域学科)	3
福嶋 秩子	(副理事長)	4
小谷 一明	(国際地域学部 国際地域学科)	5
石川 伊織	(国際地域学部 国際地域学科)	11
黒田 俊郎	(副学長／国際地域学部 国際地域学科)	15
福本 圭介	(国際地域学部 国際地域学科)	17
Ka Po Ng	(国際地域学部 国際地域学科)	20
小澤 薫	(人間生活学部 子ども学科)	21

特集「アツイ本」

山田 佳子	(国際地域学部 国際地域学科)	23
福嶋 秩子	(副理事長)	24
小谷 一明	(国際地域学部 国際地域学科)	25
荒木 和華子	(国際地域学部 国際地域学科)	27
山中 知彦	(国際経済学部 国際経済学科)	29
石川 伊織	(国際地域学部 国際地域学科)	30
福本 圭介	(国際地域学部 国際地域学科)	33
水上 則子	(国際地域学部 国際地域学科)	34

特別付録

「どこでもドアのかぎ」バックナンバー推薦書一覧	35
-------------------------------	----

ことり

小川洋子
朝日文庫

「小鳥の小父さん」にはお兄さんがいました。「小鳥は僕たちが忘れてしまった言葉を喋っているだけだ」と言うお兄さんは小鳥の言葉を理解することができました。そして「小鳥と同じように皆が忘れた言葉を喋っている」お兄さんの言葉を理解できるのは「小鳥の小父さん」ただ一人でした。

物語は「小鳥の小父さん」とお兄さんの二人だけの静かな日常、お兄さん亡きあとの小父さんのちょっぴり甘酸っぱくもほろ苦い半生を、小鳥との触れ合いに絡めて描きます。何か世間を騒がすような出来事が起こるわけではなく、ただ「小父さん」の人生が静かに流れていきます。

夜のひととき、何もかも忘れて物語に身を任せていると不思議に心が落ち着き、こんな自分の人生だってこの世に存在しているのかも、という気持ちになりました。

『博士の愛した数式』を読んだ方も多いと思いますが、どんな人間の生にも光を与えてくれる小川洋子さんが私の人生を描くとどうなるのだろう、と考えていたら自分の生き方も価値あるものに思え、前に進めるような気がしてきました。

副理事長 福嶋秩子

暁の宇品 陸軍船舶司令官たちのヒロシマ

堀川恵子
講談社(2021)

私の故郷である広島に原爆が落とされたのは軍都であり軍事的要地であったからだと聞いたことがあります。この本を読み、その真の意味を全く理解していなかったことがわかりました。書名にある宇品(うじな)というのは広島市南部の埋め立て地に作られた港です。戦後生まれの私にとっては、宮島など広島湾の島々、そこにある海水浴場に行く船の乗り場という印象しかありませんでした。しかし、ここ宇品は「重要な軍隊の乗船基地」であり、広島が原爆投下地に選ばれたのはそれが理由だったのです。日本最大の輸送基地である宇品には陸軍船舶司令部があり、戦地に兵隊を運ぶ任務とともに補給と兵站(へいたん:人員・兵器・軍需品や食料などの補給、連絡役を担うこと)を一手に担っていました。船舶輸送といえば海軍がするものだと思ってしまうのですが、日本の軍隊では陸軍が船を動かし海上輸送を行っていたのです。堀川は、膨大な資料の探索と綿密な取材により3人の陸軍船舶司令官の人生を追いつながりながら、なぜ陸軍が海上輸送を行うことになったのか、なぜそのことが太平洋戦争での日本の敗北につながったのかを明らかにしていきます。船を持たない陸軍が海上輸送を担っていたので、輸送には民間の船と船員が徴傭(ちょうよう:戦時に国家が強制的に物品を取り立てたり国民を動員したりすること)され使われていました。太平洋戦争の開戦にあたって、船舶不足についての議論が封じられました。戦線の拡大(南進)はさらなる徴傭を必要としましたが、それは民間輸送を圧迫し国民生活の窮乏につながりました。米軍は輸送の逼迫をねらって、輸送船を狙い続けました。読むほどに、無謀な戦争の実態が明らかになっていきました。また、軍隊は爆心地近くに駐屯していて全滅に近かったはずなのに、被爆直後に救助に来た兵隊たちがいて不思議だったのですが、それは爆心地から離れた宇品にいた陸軍船舶司令部暁部隊の兵隊たちだったのです。原爆の傷病者が宇品を経て湾内の似島(にのしま)に運ばれたのも、そこに陸軍の施設があったからでした。なお、本書は2021年末に大佛次郎賞を受賞しています。

夷狄を待ちながら

J・M・クッツェー
集英社文庫

クッツェーは南アフリカで長く暮らし、現在はオーストラリア在住の作家。アパルトヘイト下の南アフリカを舞台とするこの作品は、主人公が一人の少女と出遭うことから始まる。ちょうど、英国から駐屯部隊が送り込まれ、「バーバリアン（野蛮人）」掃討作戦を始めようとしていた頃の話。主人公は英軍から守るべく一人の少女を家にかくまい、彼女の部族へと連れ戻す長旅を決意する。愛欲がからみあうなかで主人公が孤立していく様は、ノーベル賞受賞のきっかけとなった作品『恥辱』と類似する。南アフリカの圧倒的な自然も随所に書き込まれた。あらためて現代を代表する作家だと思う。シンプルな文章のなかで顔を出す、きらめく詩文。たった 1 つのセンテンスでため息をつかせる技量は、どうやって身に付けられるのだろうか。

アイヌの世界に生きる

茅辺かのう
ちくま文庫

長く手に入らなかった本が 2021 年夏に復刊されていた。本書の中心となるのが、20 世紀初めに福島県相馬近郊で生まれ、数奇な運命からアイヌ女性の養子になったトキ。生まれてすぐ家族が十勝平野にわたり、彼女だけがアイヌの暮らしを営んでいく。トキは、1870 年代から 90 年近く生きた養母のウエベケレ（昔話）を語り、続いて自らの人生を物語っていく。母娘の二代語りはウチャシコマというアイヌ語りの伝統であった。この記録を依頼されたのが茅辺かのう。非文字社会で育ったトキは、「和人」への懐疑心から録音機の使用を許さない。茅辺がシャモ語に翻訳すると「味わいのないカスみたいな話」になったと難詰される。それでも茅辺の聞き書きを読むと、類を見ない言葉の柔らかさに感動し、透明性の高い文章に驚嘆するばかりだ。

この茅辺を知るきっかけとなったのが、法哲学者的那須耕介である（昨年 9 月に 53 歳でお亡くなりになった）。鶴見俊輔とともに茅辺の人生譚を聞き、『ある女性の生き方 茅辺かのうをめぐる』にまとめた那須も、亡くなる二ヶ月前に茅辺の本が復刊されたことを喜んでいたにちがいない。

マルタの鷹

ダシール・ハメット
ハヤカワ・ミステリ文庫

ハードボイルドの草分け小説で出版は 1930 年。単刀直入という言葉にふさわしい切れ味で物語は進み、次々と事件が起こっていく。20 世紀米国探偵小説の原型の一つになったと思われる作品だ。フィルム・ノワールの陰影も魅力的。レイモンド・チャンドラーの小説にも見られる妖婦とのあわい関係や、警官やチンピラの不条理な暴力への徹底的な反抗精神が特徴的だ。『マルタの鷹』、この本が本棚にあれば赤狩りの対象になったと、ブルース・カミングスの“The Korean War”に書かれていた。ハメットの切れ味が黒人作家チェスター・ハイムズのハーレムを舞台とする黒人クライム・ノベル、“Cotton Comes to Harlem” (1964) などにも引き継がれた所以だろうか。久しぶりにこの世界を味わえて楽しかった。

休戦

プリーモ・レーヴィ
岩波文庫

プリーモ・レーヴィ 2 作目の作品。第二次大戦が終わり、自由の身になったレーヴィがイタリアへと帰還するまでのオデッセイ（旅）を描く。次々と襲いかかる困難と苦悩、そのなかに滑稽で面白いエピソード（勝利が決定した日のソ連兵による演芸大会など）がふんだんに差し挟まれる。アウシュビッツから街中へと出ていく旅路で、様々な個性豊かな相棒と繰り広げる「生きんがため」の奮闘。そこにイタリア的？なユーモアが混じるのも面白い。「靴は食べ物より大事だ」といったホロコースト経験に基づく人生哲学もちりばめられている。

何よりも収容所の外にある世界を、赤児のような眼で、初めて見るかのように見つめ、描いているところがすごい。彼にとっての世界は一変したのだ。一作目の『これが人間か』の最終章が強烈な印象をもたらすだけに、その続編とも言える本書の深みに圧倒された。化学者であるレーヴィは実に多才な作家であり、小説も奇想天外。気難しい米国ユダヤ人作家、ソール・ベローが称賛し続けた理由がよくわかる。

Going to Meet the Man

James Baldwin
Vintage

黒人作家ジェームズ・ボールドウィンの短編集、その最後にタイトルの作品‘Going to Meet the Man’が用意されていた。すごい破壊力のある作品のせいで、それまで読んできた短編の印象が一気にかすみかける。南部のリンチを白人の視点で描いたボールドウィン。この視点から描くことで、社会をどれほど強烈に揺さぶれるのかを冷静に計算している。「命がけ」の執筆でもあっただろう。他にはジャズとは何かを教えてくれる「サニーのブルース」もすばらしい。「サニー」は山田詠美が編者となった短編集『せつない話』にも収録されているが、読みやすいので原文をオススメ。

複眼人

呉明益
KADOKAWA

『自転車泥棒』で大好きになり『複眼人』も購入。英語版、*The Man with the Compound Eyes* を読みかけているときに翻訳が出た。2011年の作品だが、3.11の前に書いていたはずで、いろいろな意味で予言めいた作品に思える。

冒頭、太平洋にたまり続けるゴミが津波のように台湾東部へ襲いかかる。この時、南の島から追い出された男が台湾に漂着した。この人物を含め、台湾先住民やヨーロッパ人など、言葉の通じあわない人々が同じ空間を生きることになる。彼らの間で繰り広げられる多言語かつ非言語的なやりとりが心地よい。言葉は誰のものでもない、言語ナショナリズムを否定するかのようだ。この小説はメルヴィルの『白鯨』のように、漂流する巨大な異物をその中心に据えている。これが大渦をつくり雑多なエピソードを巻き込んでいく。李琴美の芥川賞受賞作品『彼岸花が咲く島』にも共通するところが多い。この一年、呉明益の本が続々と翻訳された。台湾の同時代作家では世界で一番読まれているのではないだろうか。

ヨーゼフ・メンゲレの逃亡（海外文学セレクション）

オリヴィエ・ゲーズ
東京創元社

映画『アイヒマンを追え』の脚本を書いて一躍脚光を浴びたという、歴史家でもあるゲーズのノンフィクション小説。訳者は「海外文学セレクション」シリーズの1つ、ローラン・ビネ『HHhH』も訳した高橋啓だ。

第二次大戦後、米国はドイツ統治の都合でナチス高官ですら罪を見逃すことが多かった。「死の天使」と言われたメンゲレもその一人。彼らは南米に向かったのである。その中で、逃亡者を積極的に受け入れたペロン政権下のアルゼンチンは、まさに「有名人」の巣窟となった。ブエノスアイレスではアイヒマンの近くにメンゲレが暮らすという、すごい世界が現出したのである。メンゲレはそこからパラグアイ、ブラジルへと逃亡を続けていく。

ブラジル、そこはシュテファン・ツヴァイクが『昨日の世界』最終章で「人種差別のない国」と称賛したところ。ユダヤ人のツヴァイクがヨーロッパを脱出して移住した地にメンゲレも向かったとは。小説では戦後世界におけるナチス残党支援組織が、イスラエルのモサドと対峙する様子も読みどころとなる。

ヤマネコ・ドーム

津島佑子
講談社文芸文庫

オレンジ色の服を着た少女が『ハムレット』のオフィーリアのように池で漂う。米兵の落とし子たちが世界へと離散していく。

カズオ・イシグロ『わたしを離さないで』に出てくるような世界の片隅で身を潜める少年少女を描きつつ、戦後デモクラシーの時代にゼノフォビアが席卷する日本社会が描かれている。海の向こう、彼らの父がいる国では黒人差別が激化していた。日本の養母がそのニュースと真剣に向き合うのは、暴力の予感があったことだ。

読みながら有吉佐和子の『非色（ひしょく）』を思い出した。そこで書かれた占領期日本の黒人差別が本書の前座をつとめるのではないか。この「非色」の世界が3.11で孤立した人々、石棺で覆われた南太平洋の「ヤマネコ・ドーム」へとつながっていく。共振する世界の広さに圧倒された。近づく死の前に、津島が一気にこの小説を書き上げたことに心を強く揺さぶられる。

亜細亜の曙

山中峯太郎
河出書房新社

1930年から少年雑誌に連載された冒険活劇もの。この時期にしてすでに日米決戦近しというリアリティが如実に感じられる内容だった。マンガや映画になりやすいスーパーヒーローが登場するが、何とも薄っぺらい。南島の資源、新型爆弾、情報戦。さらにはドイツやインド独立運動への接近といった当時の状況が書き込まれる。満州事変以前の作品だが、太平洋戦争がしっかりと視野に収められていた。同年に伊藤永之介が台湾を描いた「総督府模範竹林」（集英社『戦争×文学 18』所収）とは対照的な作品だが、日本は山中峯太郎が描いた未来へと向かっていく。

『亜細亜の曙』は数年前に再版され、手に取りやすくなったが、もう1つの「アジア」もの、呉濁流の『アジアの孤児』は古本でも手に入らない。英訳では読めるが、こちらの再版も期待したい。

城壁

榛葉英治
文学通信

1937年の7月から8月にかけて盧溝橋事件、第二次上海事変と続くなか、江藤隊が杭州湾に上陸する。彼らは南京の「城壁」へ向けて遠征を開始した。主要な人物の多くが東京下町の出身者。小作農の倉田曹長と大学出の江藤少尉、寿司屋を営んでいた鈴木上等兵と馬喰の寺本伍長など、対比的な性格付けがなされている。玉ノ井遊郭に姉がいる渡辺上等兵はあっけなく城壁前で戦死するが、凄まじい場面が描けたのは、満州にいた榛葉（しんば）が偶然にも一次資料をたくさん入手できたから。南京入城後、避難民が集まるところで「残敵肃正」が始まっていく。サブラ・シャティーラの虐殺と同じ世界であった。

もう1つ、同じ題名の短編を紹介したい。小島信夫の「城壁」だ。こちらはまさにイマジネーションの産物たる日中戦争小説。ブツァーティの『タタル人の砂漠』のような幻想性を併せ持つ、ユーモアたっぷりの作品だ。すごく面白い。再読したいのは小島作品のほうだ。

名誉と恍惚

松浦寿輝
新潮社

「魔都」上海、聞き飽きるほどにこの言葉は多用されてきた。多くの作家を魅了してきたその魔性には、「共同租界」(International Settlement)という植民地分割が関係する。いわゆる「シヨバ割り」をほどこされた大都市では、蒋介石の国民党と日本軍が衝突を繰り返す中、様々な利権をめぐり「裏の世界」が深く、広く根を張っていく。うまくやれば一攫千金を手にするという幻想がはびこる町なのだ。この野心と欲望の編み目に、主人公の「日本人」警官が絡め取られていく。

この警官が転落人生を歩むきっかけの1つが、古物商を営む老人だった。彼はハンス・ベルメールや四谷シモンのように妖艶な人形を巧みに作る上海人で、主人公は彼の手わざに深く魅了されていく。こうした個人的な嗜好に情報機関が目を付けて、という展開だ。上海の外灘(バンド)の対岸にある浦東など、共同租界の外縁についてもいろいろと教えてくれるエキゾチックな長編小説だった。

オペラのイコノロジー 3 魔笛 <夜の女王> の謎

長野順子
ありな書房(2010)

モーツァルトの歌劇『魔笛』の研究書・解説書です。

本書は、『魔笛』という作品の特異性を、18世紀末という啓蒙主義の時代を背景に考察しています。前半と後半で善玉と悪玉が入れ替わっちゃうなど、筋書がめっちゃくちゃであるといった批判もあれば、フリーメーソンとの関係を云々する向きもあるこの作品です。その一方では、『魔笛』で感動しない人はそもそも音楽を必要としていない人間だ、なんていう過激な賛辞もあります。でも、その実際はどうなのでしょう。まずは作品を鑑賞するのが先なのでしょうけれど、長野さんの分析にも頷くところがたくさんあります。特に、この作品の上演について、ベルリンの舞台とウィーンの舞台の比較は面白いです。ベルリンでは10年ほど前まで、19世紀の初頭に行われていた舞台装置と演出を再現する上演が行われていました。この舞台装置を手掛けたのは、19世紀の前半にベルリンの都市計画にたずさわった建築家のシンケル (Karl Friedrich Schinkel, 1871-1841) でした。この人は都市計画や建築設計の他に、絵画も残しています。その絵画というのが、「パノラマ」という興行の背景画でした。「パノラマ」というのは、いってみれば、映画館ほどの大きさの巨大な空間にいろいろな絵画や装置をしつらえて、照明を当てることでスペクタクルな場面を再現して見せるという、いわば巨大な極彩色の影絵みたいなものでした。「パノラマ」は18世紀から19世紀への転換期に大流行りして、これがのちに映画を生み出す源流の一つとなっていたものでもありましたから、興味は尽きません。

この本は「オペラのイコノロジー」というシリーズの三巻目ですが、第一巻はムスログスキイの『ボリス・ゴドノフ』、第二巻はモンテヴェルディの『オルフェオ』、第四巻はプッチーニの『トスカ』、第五巻は再びモーツァルトの『フィガロの結婚』、最後の第六巻はオッフエンバックの『ホフマンの物語』を扱っています。関心のある人は他の巻もどうぞ。

図説精読 日本美の再発見 タウトの見た日本

ブルーノ・タウト
篠田英雄訳 沢良子編
岩波書店(2019)

1933年に来日したドイツの建築家ブルーノ・タウトは、日本でいろいろな建物を見て、いろいろな経験もして、『日本美の再発見』、『日本文化私観』などの何冊かの日本文化に関する著作を残しています。それまでほとんど忘れられていた桂離宮の美をタウトが再発見した、なんていう説はいまだにまことしやかに語られていますが、これはまあ、眉に唾をつけて見た方がいいような俗説です。とはいえ、これらの本でヨーロッパに向かって、ある一定の日本観を示して見せ、それが教養ある西欧人の常識みたいになってしまったのかもしれない。そしてまた、外国人に褒められたから、きっと日本は凄いだろなんていうことにもなっていました。しかし、一方でまた、当時の日本の先進的な建築家たちが、東京駅を設計した辰野金吾のような古典的な建築家に対して、近代主義を主張する手段としてタウトの権威を借り、タウトを誘導して、タウトに自分たちが言いたいことを言わせた、といったところもあったようです。なぜなら、どこに案内してどこを見せるか、日本の建築家の側が周到な計画を練った形跡があるからです。

さて、本書は、当時篠田英雄氏の訳で出版された旧訳をあえて採用し、これに、タウトが訪れた場所の写真等を組み合わせ、画像と文章で検証してみようという試みです。90年前のドイツ人が日本のどこをどう見たのか、それがどのように周りの人々から利用されたのかを考えてみるための、興味深い企画です。少なくとも、近年はやりの「すごいですねニッポン」みたいなブームを反省する材料にはなります。

タウトが撮ったニッポン

酒井道夫・沢良子編
武蔵野美術大学出版局(2007)

前項で紹介したのと同様の企画ですが、こちらは、タウトが日本周遊の旅の途中で自分で撮影した写真を集めた写真集です。この中には、1935年の5月に岐阜から新潟を経て秋田に向かった際の写真も収められていて、新潟の百貨店の喫茶室が建築家の目からぼろくそにけなされています。いったいどのビルだったのか、興味深いところ。

RESPECT

男の子が知っておきたいセックスのすべて

インティ・シャベス・ペレス
みつつん訳 重見大介医療監修
現代書館(2021)

2021年度後期のジェンダーの講義では、ジェンダーについて考えてもらうための教育プログラムを、グループ学習を通して作成してもらうという試みをしました。完成度もグループでまちまちでした。それに、みんながジェンダーに関する無自覚のうちのバイアスの存在を指摘してはいたけれども、それを考えているそれぞれの学生がこうしたバイアスから自由になっていたとは言い切れない場面もあったりはしました。しかし、大切なのは、無自覚である事柄については、自分の力だけでこれを自覚化することはおそらく不可能だ、ということに気づくことです。ですから、無自覚を自覚化するには、共同作業が必要なのです。そういう意味で、不十分な到達点ではあったけれども、話し合いを重ねて、ちょっとずつではあるけれども気づきが始まった、という成果はあったと思っています。もう最先端に行ってしまう学生には、周りの学生の未到達部分が目について、怒りが収まらないこともあったかもしれませんが、それもまた学習の一環です。世界はそんなに簡単には変わらないのです。自覚があって、変えないとどうしようもないことも自明なのに、目先の利害が対立してちっとも温暖化を阻止できないのですから、無自覚なジェンダー・バイアスを変えていくのはもっと大変です。何しろ無自覚なのだから。

さて、そういう授業の中で、自分たちが受けてきた性教育は圧倒的に不十分だったという指摘が何度もありました。本書は、それに応えることのできる貴重な一冊になるだろうと思います。相手に対する尊敬がないような性行為・性的な言動は、それ自体が性暴力である、というのが本書の主張です。だから、タイトルが Respect なのですね。男子高校生向けに書かれた性の教科書です。異性愛のみを正常とするような偏見を克服しようという主張も取り込まれています。なかなかストレートな表現にびっくりする人もいるかもしれませんが、ぜひご一読を。

ピエタ

大島真寿美
ポプラ文庫(2014)

小説を一つ。イタリアの作曲家ヴィヴァルディ (Antonio Lucio Vivaldi, 1678-1741) と
言えば、協奏曲『四季』で皆さんもご存じの作曲家だと思います。一般にはこの曲しか知ら
れていないかもしれないですがね。この人はカトリックの司祭でもあり、ヴェネツィアのピ
エタ音楽院で長いこと音楽の指導をしてもいました。もっとも、《音楽院》とは言っても、
これは普通の音楽学校ではありません。修道院が経営する女子の孤児院でした。孤児が生き
ていくためには何かの技術を身に着けないと苦労するだろうと考えた修道院は、孤児院の子
どもたちに音楽を教えたのでした。ヴィヴァルディの作品の多くは、この孤児院で暮らす幼
い女の子たちのために書かれたものでした。

しかし、音楽には流行り廃りがあります。時代の流れに乗り遅れたと言われて、ヴィヴァ
ルディの作品はだんだん人気なくなります。孤児たちの演奏会で喜捨される浄財で孤児院
が運営されていたこともあり、人気がなくなったヴィヴァルディは孤児院の教師の中でも浮
いた存在となり、経営陣とも対立し、とうとう孤児院を追われ、ヴェネツィアを追われ、最
後はアルプスの向こうのウィーンで客死します。

ヴィヴァルディ先生の異国での死のうわさを聞いた、かつて孤児院で音楽を習っていた、
今はもう社会に出ている女性たちが、ヴィヴァルディ先生の親戚や縁者をたどって、死の真
相を知ろうとする物語です。ヴィヴァルディ自身は物語には登場しません。けれども、ヴィ
ヴァルディの死と、絶頂期を過ぎたヴェネツィアの没落とが合わせ鏡になって、物語は展開
します。深い余韻を残す美しい物語です。

ヴィヴァルディの死から半世紀の後、ヴェネツィア共和国はナポレオンに侵略されて陥落
し、その結果、オーストリア領となります。イタリア王国が統一され、ヴェネツィアがこれ
に加わるのはさらにそれから 90 年以上も後のこととなります。

タイトルの《ピエタ》は、孤児院 (= 音楽院) の名前でもありますが、もともとはイタリ
ア語で哀れみや慈悲という意味です。また、聖母マリアが処刑されたイエスの亡骸を抱いて
いる姿を、絵画や彫刻では《ピエタ》と言います。ヴァチカンのサン・ピエトロ大聖堂に
あるミケランジェロの作った『ピエタ像』は、美術の教科書などで見たことがあるのではな
いかな？

マリー・アントワネット（上下巻）

シュテファン・ツヴァイク
角川文庫

この3月で国際地域学部教授の石川伊織さんが定年を迎え退職されます。「どこでもドアのかぎ」の常連寄稿者でもある石川さんに、手向けとして、なにか一冊をと思い立ち、本書を選びました。石川さんは、ヘーゲルがご専門の哲学者ですが、ご存じの通り、アートに対する学識が半端なく、とりわけ、奥様がウィーンで研鑽を積まれたピアノ弾きでいらっしゃることもあって（と私が勝手に思っているのですが・・・）、書物と並んで、音楽への愛は、無限大です。

さて、ウィーン由来の文学者といえば、旧きは、やはりホーフマンスタールなどでしょうが、浅学の身、私は彼をオペラでしか知らないのも、彼とも親交のあったツヴァイクにしました。ツヴァイクならけっこう読んでいたので、あとは彼の数ある傑作のなかから何を選ぶかですが、中野京子さんの新訳があり、比較的入手しやすいので、この本に白羽の矢を立てました。伝記作家ツヴァイクが本領を発揮した『ジョゼフ・フーシェ』と双璧をなすフランス革命もの名作です。読み物としてすこぶる面白く、中野さんが訳者あとがきで書いているように池田理代子氏の『ベルサイユのばら』の種本でもあります。

バステューユ襲撃の日、その報にふれた国王ルイ 16 世は驚いて口ごもります。「それは反乱ではないか。」パリから早馬で凶報を伝えた臣下リアンクール公は無慈悲に訂正して、ことの真実を王に伝えます。「いいえ、陛下、革命です。」そして王妃アントワネットは、革命を理解せず、ただひたすら革命を憎み続けます。ツヴァイクは、こう綴っています。

マリー・アントワネットにはとちとちあえず暴力しか見えていないので、自由など信じられない。また人間しかみないので、荒々しく世界を攪乱するこの運動の背後に、目に見えない理念が立っていることにも気づかない。人間関係のもっとも大規模な基本原理を我々に伝えてくれた、この運動の偉大で人道的成果について、彼女は全く気づかなかつたし、全く理解しなかつた。信仰の自由、思想の自由、出版の自由、職業選択の自由、集会の自由を確立し、階級、人種、宗派の平等を近代法の第一として取り入れ、中世の恥ずべき残滓たる拷問、夫役、奴隷制を廃止しようとする精神目標が、街路での血なまぐさい暴動の背後にあることを彼女は理解しなかつたし、しようとも思わなかつた。混沌だけが彼女の見ているものであり、この見通しの悪い喧噪の中で新たな秩序が、ぞっとするような痙攣を経て生まれ出ようとしていることには気づかない。だから彼女は最初の日から最後の日まで、指導する者とされる者を、ありったけの反抗心で憎悪し続けたのだ。こうして来たるべきものが来た。マリー・アントワネットが革命に対して不公平だったため、革命も彼女に対して厳しく不公平になる（上巻 334-335 頁）。

でも誰が愚かなフランス王妃を責められるでしょう。革命のむきだしの暴力の前で、それも民衆から激情の刃を自らの喉元に突きつけられた状態で、暴力の奥に佇む革命の真実と理性の狡智に思いをいたすことができる人がいるとしたら、その人は賢者の名にあたいするでしょう。残念ながらというべきでしょうか、王妃マリー・アントワネットは、わたしたちと同じ、歴史が引き起こす響きと怒りにおびえる、ただ普通の凡庸な人間だったのです。

大衆の反逆

オルテガ・イ・ガセット
佐々木孝訳
岩波文庫

昨年、ある学生に「思想書ってどう読んだらいいのですか？」と聞かれて、じゃ一緒に読んでみようかと始めた夜のオンライン読書会。選んだのは、その学生が帯の文句に惹かれて手に取ったというスペインの哲学者オルテガ・イ・ガセットの『大衆の反逆』。1930年代に出版された本の新訳だ。ああでもない、こうでもない、無駄話をしながらやる読書会が楽しくて、対話する魂があつというまに時空を超えていく。今、自分たちは、いったいどこにいるのか。なぜ、この社会はこれほどまでにモラルを失ってしまったのか。ぱっくりと口を開いた歴史の亀裂をのぞき込みながら、迷子になりつつ、文庫本を鏡に世界を映してみたりする。オルテガはいう。現代の特異性とは、大量に出現した「みんなと同じでいい」という平均人が大きな権力をもったことにあると。他人事ではない。

若い人と一緒に本を読むのは楽しい。次は、フランツ・ファノンを読もうか、それともハンナ・アーレント？ 夜の読書会、皆さんも一緒にどうですか？

ぼくが遺骨を掘る人「ガマフヤー」になったわけ。

具志堅隆松
合同出版

昨年、私がこの本を手にとったのには、わけがある。この本の著者である具志堅隆松さんが三月初めに沖縄県庁前でハンガーストライキを始めたのだ。沖縄本島の南部には今も多く、の戦没者の遺骨が土に埋もれたままだということは皆さんもどこかで聞いたことがあるだろう。沖縄戦の激戦地だった本島南部では、本当にたくさんの兄弟や姉妹、家族が逃げ惑い、殺された。ほ・ん・と・う・に・た・く・さ・ん。そこには、全国から兵士として招集された日本人の青年たちもいた。当時、帝国日本の植民地だった朝鮮半島からつれてこられた男女もいた。もちろん、若き米兵たちもいた。そして、その多くの人たちが今も故郷に帰れないまま土の中でぼろぼろの遺骨となって眠っている。ところが、である。日本国政府は、そのような激戦地の「土」を、今、辺野古で強行されている新基地建設のための埋め立て工事に使うという。なんということだろう。遺骨を掘り、家族のもとに戻すボランティアを続けていた具志堅さんは、体を震わせた。「死者への冒瀆だ」と。ここから具志堅さんのハンストという非暴力直接行動が始まった。

何重もの意味でまちがった国策が、今日のこの瞬間も続いている。他人事ではない。これは、この国の「民主主義」の結果だから。そんなふうに思いながら、ぼくはこの本を手にとった。この一冊を読み通すと、土のなかの遺骨のリアルな手ざわりが伝わってくるようだ。想像力よ、めざめよ。

沖縄の米軍基地を「本土」で引き取る！ —市民からの提案

沖縄の米軍基地を「本土」で引き取る！編集委員会・編
コモンズ

2022年、沖縄が「本土」に「復帰」して50年を迎える年だから、どうしてももう一冊紹介させてほしい。仲間と一緒につくった自分の本を紹介することになってしまうけど、どうか許してください。突然ですが、ぼくは、これまで「本土」の日本人が沖縄に押しつけてきた基地は「本土」に引き取り、日本全体で問題解決すべきだと考えています。この本の中でもそのことを主張しました。沖縄戦からずっと続く、沖縄を犠牲にしたシステムはもう終わりにしたいのです。こんなにも無責任で、醜く、愚かな政策は、もう終わり。というか、すでに終わっているのです。みんな本当は気づいているのに、気づかないふりをしているだけ。土台が腐っており、もう終わっています。

アメリカの公民権運動は、有名なリーダーたちの運動ではなく、無数の名もなき普通の民衆たちが主人公になった運動でした。この本の著者たちも、福祉の仕事をする人だったり、会社員であったり、教員であったり、定年退職者だったり、普通の市民です。まったく安全保障の専門家ではありません。でも、本をたくさん読んで、学びあって、ほんとうの真実を求めて、無責任な専門家とだって議論します。あなたも、ぼくも、誰でもそうですが、微力ではあるが、無力ではない。ぼくは、私たちの「微力」こそがこの国の社会構造の根本的な部分を変革していくと思っています。ちょっと熱い？

Lord of the Flies

William Golding

I don't usually read novels. But, this time, I am going to recommend one to you: *Lord of the Flies*. Please don't mix up with *Lord of the Rings*, which is, equally famous, a trilogy of fantasy by J.R.R. Tolkien and was made into movies and TV series.

Written by a British novelist, William Golding (1911-1993), *Lord of the Flies* was awarded the Nobel Prize in Literature in 1983. Just like many other acclaimed pieces, its readers are from a wide range of backgrounds. As a student of political science, I, not surprisingly, read the novel from that perspective.

The main characters are a group of school students who are stranded on a remote, isolated, and uninhabited island after plane crash. The story is about the natural need for leadership and the rivalry that follows, how unity degenerates into factional struggles and fighting, and how innocent teenagers become savages and even murderers. It could be a bit dark for some but it urges us to reflect on the nature of politics, the impact of the social environment on our behaviour, the struggle for keeping conscience clear and for upholding values of civilisation.

If you find it difficult to read the novel, you may try the Japanese translation, 蠅の王, before going back to the original. Happy reading.

ぼく モグラ キツネ 馬

チャーリー・マッケジー
川村元気訳
飛鳥新社(2021)

素敵な絵本です。8歳の息子と一緒に読みました。一緒に笑いながら、一緒に考えさせられました。

次に、息子は2歳の弟に一生懸命読み聞かせしていました。2歳の弟は、絵をよく見て、みんなが笑うところで一緒に笑っていました。「きみがいると世界はでっかくかわる」。キュンとしました。

特集

アツい本

やさしい猫

中島京子
中央公論新社

入国管理局と聞いて何を思い浮かべるでしょうか。以前の私なら留学時代の韓国でビザの延長に何度か訪れた役所の一つだったかもしれません

しかし日本ではちょうど 1 年ほど前、名古屋入管に収容中されていたスリランカ人のウィシュマ・サンダマリさんが死亡した事件をきっかけに、入管の人権を無視した非人道的な行為や、司法を逸脱した権力行使の実態が明るみに出て、メディア等で大きく取り上げられることになりました。

『やさしい猫』は『小さいおうち』、『夢見る帝国図書館』に続いて手に取った中島京子さんの作品です。前二作を読んで、著者の綿密な取材と研究に裏打ちされた創作に感銘を受けていた私は、入管行政の矛盾というウィシュマさんの事件にとどまらないこの深刻な問題を読みやすい小説に仕立てたと聞いて関心を抱きました。

物語は高校生のマヤちゃんが「きみ」に語り聞かせる形で、シングルマザーの母「ミユキさん」と、スリランカ人の「クマさん」の出会いから東京入管への収容、それからの出来事を綴ります。

マヤちゃんがどこにでもいそうな普通の高校生であること、クマさんの親しみやすい人柄に引き付けられ、読み始めたら止まらなくなる展開が繰り広げられるのですが、クマさんが収容されてからの出来事にはさすがに心が重くなりました。しかしここでもマヤちゃんの語りが先へ先へと誘います。怒りを怒りとして表現せず、あくまで読ませる作品に創り上げたのは、まさに著者の小説家としての熱い情熱の為せる技でしょう。

さて、マヤちゃんが語りかけていた「きみ」とはいったい？ 最後まで読めばわかります。

副理事長 福嶋秩子

28 言語で読む「星の王子さま」 世界の言語を学ぶための言語学入門

風間伸次郎・山田怜央編著
東京外国語大学出版会(2021)

500 ページを越える本ですから、とにかく厚い本ですが、言語学者の言語愛が詰まった熱い本でもあります。

知りあいの言語学者に各国語版の「星の王子さま」を集めている人がいます。一種の言語オタクかもしれません。この本のあるのを知ったとき、同じようなことを考える人が他にもいるものだと思います。けれども、この編著者たちのすごいところは、各国語版の「星の王子さま」を使って、世界の諸言語のカタログと言語学の入門書をつくってしまったということです。

なぜ 28 の言語かという、編著者たちが勤めている東京外国語大学の専攻語が 28 言語あるからです。学生たちがそれぞれの専攻語を、その言語がいったいどんな言語なのか知らずに勉強し習熟するうちに、最初は新鮮に思っていたその言語の面白さがだんだん見えなくなってくるそうです。専門の言語学者である先生たちはそれがもったいない（歯がゆい？）と思ったのでしょうか。

本書の第一部は言語学入門となっているので、そこで言語の仕組みを学んでから、第二部の言語のカタログ（各言語の概説と各言語による「星の王子さま」）をみていくと、それらの言語の多様性ととも共通点が見えてきます。言語学の知識は言語の海を航海するための羅針盤のような働きをします。日本語と英語だけでは見えない世界がそこにはありますし、日本語の特徴を世界の言語の中でとらえ直すこともできます。

28 言語とは以下の通りです。大言語はほぼ網羅されています。英語、ドイツ語、フランス語、イタリア語、スペイン語、ポルトガル語、ロシア語、ポーランド語、チェコ語、中国語、朝鮮語、モンゴル語、フィリピン語、マレーシア語、インドネシア語、カンボジア語、タイ語、ラオス語、ベトナム語、ビルマ語、ベンガル語、ヒンディー語、ウルドゥー語、ペルシア語、アラビア語、トルコ語、ウズベク語、日本語

海をあげる

上間陽子
筑摩書房

つい熱くなって買ってしまった本。タイトルが素晴らしい。海をあげるとは何のこと、とページをめくり始めると、少しずつ「海をあげる」の思いの深さに、その容易に届かぬ底の深さからめとられていく。本書との出遭いは昨年6月、沼垂にあった今はなき Books f3 (ブックスエフサン)。小森はるか・瀬尾夏美の映画『二重のまち/交代地のうた』に出演した古田春花のコンサートがあった日だ。ライブ会場に到着後、2軒隣りにお気に入りの本屋があるとゼミ生が言ったので急ぎ向かった。写真集をたくさん並べた古めかしい面構えの本屋さん。すぐに気に入りざくっとジャケ買い。ライブまで10分しかない中、素敵な女性店長と話していたエッセイスト里村洋子さんにも遭遇。初めて入ったこのお店が月末で閉じると聞いてギアが入った。表紙の印象だけで集めた中にこの本が入ってきた。とても幸せな気分になれた初夏の日だった。

なお、この本屋と「エフ」でつながる「エフスタイル」という雑貨屋が女池 IC 近くにある。写真エッセイ『エフスタイルの仕事』をこの本屋で落手した学生に教わって訪問。能登半島の珠州市で暮らす映画『ちむぐりさ』主演の菜の花さんも新潟駅から歩いて訪れたという。素敵な本屋さんから良質な雑貨屋につながれたことがうれしい。

火山島

金石範
文藝春秋

厚い本。全7巻、200万字を越える長編（20冊くらいの分量になるだろうか）で、20年ほどにわたって文芸誌に連載された。舞台は済州島、いわゆる四・三事件の島民武装蜂起を描く作品だ。これほど長い作品はうまく紹介できないが内容はあまり忘れていない。長い時間をかけて読むことは、登場人物と一緒に暮らしているようなものだから。特に、圧倒的に不利な状況で、どのような活路を見出せるのかと思索しながらソファで酒を飲み続ける主人公、李芳恨とは親友になった気がする。長く秘匿されてきた歴史を、少しずつ掘り起こしてきた金石範。資料もないなかで、なぜこれほどのディテールを伴う作品が書けたのか。

1990年代半ばに講演で祖国分断に関する作家の思いを聞き、21世紀以降、作者の「おっかけ」をすることになった。『火山島』を読もうと決意するも長編のため幾度もたじろぎ、1～3巻を3冊ずつ購入して家と研究室の目立つところに置いた。結果、仕事で研究室に閉じこもる日の続く夏期休暇中に読み始めている。忙しいから本が読めるのか。刺激になったのが辺野古テント小屋のリーダー、安次富浩さんが読んでいたこと。浜辺で手擦れした第5巻を手にしてのを見て、『火山島』が長い闘いの友となる本であり、人生の指南書になると思った。それにしても、金石範さんは21世紀に続編を2冊出版している。90歳を越えても雑誌に連載し、3年前に2冊目が出た。今、96歳。歴史認識が変わるまで書き続ける、死ぬことができない作家だ。

日本のフェミニズム——150年の人と思想

井上輝子

有斐閣(2021年12月)

(参考: Angela Y. Davis, Gina Dent, Erica R. Meiners, Beth E. Richie, *Abolition.Feminism.Now.*(Penguin, Random House, 2022); 江原由美子『増補 女性解放という思想』(ちくま学芸文庫, 2021年)

インターセクショナリティという言葉が日本でも流行っている。これは1989年にキンバリー・クレンショーの論文で最初に使われた用語・概念であり、その後も黒人女性の活動家・理論家たちの自前の主張として展開されてきたが、警察によるジョージ・フロイドさん殺害事件をきっかけに再燃したBLM(ブラック・ライヴズ・マター運動)と同時に、クレンショー他による#SayHerName運動等によってもこの用語・概念が拡散されたのである。アフリカ系アメリカ人の置かれてきた社会状況と歴史という文脈に根差した用語・概念であることの理解がまず必要であると思う。

日本で暮らす私たちはしばしば、かつこよさそうな目新しいカタカナの用語・概念が流行るときナイーブに飛びついて、それらを身に纏って装ったり鎧とし、自分たちがまるで最先端の「種類の」知識人であったり、既存の体制に対して果敢に闘いを挑む正義であると誤認することがあるように思う。わたしはこの点を、自戒をこめて敢えて指摘しなければならないのではないかと、井上輝子さんのような日本のフェミニズムを長く牽引されてきた方が亡くなったこの節目に強く感じている。

例えば、ポストフェミニズムの主張は、井上輝子さんのような命をかけてボトムアップの運動・研究を地道におこなってきた人たちとその歴史を簡単にゴミ箱に捨ててしまうように思えるのだが、はたしてそれでよいのだろうか。ポストコロニアリズムが現存する植民地主義から脱するため・抵抗のための研究としてアクチュアルな意味を持つのでは訳がちがうのではないか。そのような主張が研究のための研究であるならば、私は百害しかないと考えている。現在ジェンダー史学会代表をつとめる貴堂嘉之さんが社会史研究を「ひとの顔の見える歴史」と噛み砕いて説明されるように、一つひとつの歴史上の事例や、個人の経験を地道に検証し、丁寧に掬い上げる作業は気の遠くなるプロセスであるのだが、それらを尊重し学ぶことは重要であると思っている。まして、それらが一見華やかな輸入の用語・概念によって一刀両断されたり、置き換えられたいされるべきではない。アメリカの公民権運動家であり刑務所の産獄ビジネス化を長く糾弾してきた社会学・哲学研究者である黒人女性のアンジェラ・ディヴィスが、パートナー等と執筆した最新書 *Abolition.Feminism.Now* において「今こそアボリション・フェミニズムを！」と訴えている通りである。

近現代日本のフェミニズム・女性解放の歴史も同様ではないか。フェミニズムは乗り越えられるべきものではなく、現在の日本においてこそ、その歴史が丁寧に再検証・再認識され、そしてしっかりと embrace されるべきものであると、私は考えている。一人ひとりによってそのようにフェミニズムが受け止められた日本社会は多様な人びとのLife(生活・命・人

生)にとって少しでも明るい社会になっていると私は信じているのだが、そうなるかどうかは、私たち一人ひとりにかかっている。

インターセクショナリティに戻ると、構造的な複合差別については、日本では上野千鶴子さんがはやくから指摘しているし、アメリカ社会について人種とジェンダーの足し算ではなく、掛け算で状況を理解する必要性についてはアメリカに限らない歴史研究者が具体的な歴史上の事例研究のなかで当然取り組んできたことでもある。さらに言えば、昨年度から東大の教養・必修科目として市民権を得るようになった「ジェンダー」についても、例えば、西洋史家ナタリー・Z・ディヴィスのように、この用語・概念がでてくる前からこの課題にラディカルな形で取り組んできた研究者も少なからずいるのである。最先端の理論だと思ったことが、いわゆる“Old wine in new bottles”であったということはよくあることである。

かっこよさそうな輸入の概念を表面的に取り入れてその視点からすべてを一刀両断してしまうことにより、先人たちの血の滲む努力や功績の歴史を見誤るだけではなく、踏みはじらないためにも、私たちは今こそ謙虚に歴史から学ぶ必要があるのではないか。日本に暮らす私たちに、その手助けをしてくれるのが本書であると思い、今まさに社会のなかに新たに大きな歩を進めていく皆さんに、フェミニスト運動家・研究者として激動の時代を生き・闘い抜いた井上輝子さんの「遺書」であるこの本を（冒頭に載せている同様に重要な江原さんとディヴィス他の2冊の書とともに）紹介したい。

資本主義と闘った男 宇沢弘文と経済学の世界

佐々木実
講談社

ノーベル経済学賞を受賞した経済学者の功績が、はたしてどれほど人々の日常生活を豊かにしたのかという問いは、経済学の意味を問うこと同様、私のような一般人にとって確信を持ってない愚問かもしれない。だが、ノーベル経済学賞にもっとも近かった日本人といわれる宇沢弘文の伝記でありながら、近現代経済学の流れを概観できる本書は、冒頭の問いを考えるために、国際経済学部に限らず、全学の皆さんに読んでもらいたいアツい（厚くかつ熱い）本といえる。

昭和の初めに鳥取で生を受け、軍政化する日本に疑問を懐きつつ成長し、太平洋戦争中に学問に目覚めて数学者を目指す。敗戦後には日本の未来に役に立とうと経済学に転身し、一時マルクス経済学に近づきながらも渡米。資本主義経済学のメッカで世界をリードする数理経済学者として囑望されながらも、ベトナム戦争の遂行に邁進する資本主義経済学を捨て帰国。一転、公害や地球温暖化にコミットする独自の「社会的共通資本」の概念に基づく行動する経済学者の途を歩む。東京大学退官後に新潟大学に異動し、成田闘争に係り「三里塚農社」を構想。東京電力福島第一原子力発電所事故を憂慮しつつ2014年に亡くなるまでの熱い生涯を追ったのが本書。

県立大学図書館所蔵・【城山三郎賞（第6回）】・【石橋湛山記念早稲田ジャーナリズム大賞文化貢献部門（第19回）】受賞

大学図書館には、「社会的共通資本」をはじめとする著書が多数所蔵されています。

A Greek-English Lexicon, with a revised supplement (1996)

通称：リデル&スコット『ギリシア語辞典』

Henry George Liddell & Robert Scott. Revised and augmented throughout by Sir Henry Stuart Jones with the assistance of Roderick McKenzie and with the cooperation of many scholars. Clarendon Press, Oxford(1996)

まずは「厚い」本から。分冊になっている全集を除けば、きっと辞書が一番「厚い」本ではないかと思います。私が持っている辞書の中でも一番分厚いのはこのオックスフォードのギリシア語辞典です。初版は1843年ですから、180年近くも前のことになります。現行のヴァージョンでも序文の日付は1925年ですから、息の長い辞書です。1940年までに9版を重ねて、これに補遺が付け加えられたのが1996年です。ちょうど、私がこの大学の前身の県立新潟女子短期大学に赴任した年ということになりますねえ。感慨深いものです。もっとも、私がこの辞書を入手したのは、ほんの数年前のことなのですがね。

辞書というのは作るのも、改訂するのも大変な作業を必要とするものです。分冊になっているからここでは紹介していませんが、グリム童話で有名なグリム兄弟が巨大なドイツ語辞典を作っています。この辞書は兄弟が編集を始めたのが1838年で、最初の巻が出版されたのが1854年。全32巻が完成したのはなんと1961年で、補巻の33巻目は1971年に出ています。この間に何度も戦争と二度の世界大戦があり、ドイツが東西に分裂していたにもかかわらず、この辞書の編集作業は東西両ドイツの協力のもとに勤められたという経緯があります。

こういう巨大な辞書に限って、書名は控えめです。リデル&スコットは *A Greek-English Lexicon* です。Lexicon はむしろ「単語集」程度の意味ですし、しかも不定冠詞付き。歴史学者のトインビー (Arnold Joseph Toynbee) の、それこそ「厚く」て「熱い」主著のタイトルがそっけないことに *A Study of History* だったみたいなのです。グリムの辞書も、単純に *Deutsches Wörterbuch* = ドイツ語辞典です。

本学の図書館には、リデル&スコットの辞書は、これをもとに作られた簡約版が二種類収められています。グリムのドイツ語辞典はこの1月末まで私の研究室にあったものが図書館に返却されていますので、見るすることができます。

ところで、余談ですが、辞書を引くのは言葉の意味や使い方がわからないからであると思っていると、大変なことになるのですね。なぜって、リデル&スコットもグリムも、そもそもこうした辞書を読むためには何カ国語も知らなくちゃならなくて、それも、現代語ばかりじゃなくて古語も知らなくちゃならないのですね。辞書を読みこなせたら、語学のエキスパート！ ということですね。

カーレル・ファン・マンデル「北方画家列伝」注解

カーレル・ファン・マンデル
尾崎彰宏・幸福輝・廣川暁生・深谷訓子編訳
中央公論美術出版(2014)

美術書は、分厚いだけでなく、判型も大きいですが、これは図版が入るからです。特に、中央公論美術出版の本はデカイ！そして、高価です。研究にどうしても必要ということでない、ちょっと買うのをためらう程度に高価です。

ヨーロッパ美術というと、イタリア・ルネサンスの画家が真っ先に頭に浮かぶという人も多いでしょう。学術も芸術も、ルネサンスのイタリアからアルプスを越えて西欧に広まったのだ、という理解の仕方ですね。ですが、どうやら現在の洋画で主流である油彩画は、ネーデルラントが発祥でした。

イタリアの絵画が、王宮や教会を飾るためのものだったことから、絵画は多くは壁画や天井画であったりします。そのための技法がフレスコでした。「フレスコ」とはイタリア語で fresh のことです。建物の壁に塗った漆喰が乾かないうちに絵を描き、彩色をします。乾いてしまえばもはや修正はできません。他方、乾けば何度も塗り重ねが可能な技法としてはテンペラがありました。これは卵などを乳化剤として使用して、絵具を定着させる方法です。これに対して油絵具は、顔料を油で溶いて塗り重ねていきます。その最大の特徴は透明感でしょう。この技法が開発されたのが、イタリアではなくてフランドルだったということです。マンデルが言う「北方」はアルプス以北のことで、特に、現在のベルギーやオランダを指します。ファン・エイク兄弟やブリュゲル父子がその代表ということになります。

これに先行する画家の伝記集には、ヴァザーリ (Giorgio Vasari, 1511- 1574) の『芸術家列伝 (Le vite de' piu eccellenti pittori, scultori e architettori)』があります。フィレンツェのサンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂のドームの天井画として最後の審判を描いたヴァザーリは、文筆にも携わり、ルネサンスの画家・彫刻家・建築家（と言っても、これらに厳密な区別はなかったと思われるが）の伝記を書きました。こっちの訳書は六分冊にもなる大著なので、今回は取り上げませんでした。そのうえ、最後となる第六巻目はまだ刊行されていません。マンデルはこれに倣って、同胞の画家たちの伝記を書いたのです。しかし、内容には錯誤がたくさんあります。事実、オランダ・ベルギー（つまりネーデルラント）の絵画作品の帰属や制作年代が確定してくるのは、19世紀半ばになってからでした。そういう意味で、研究の資料として重要な著作なのですが、注解がないと、マンデルの記述が正しいのかどうか分かりません。そういうことで、本文より注が長くなっちゃうのです。

ギリシア記

パウサニアス
飯尾都人訳編
龍溪書房(1991)

著者は紀元後二世紀の人。ソクラテスやプラトンやアリストテレス、はたまたソフォクレスやアリストファネスからはだいぶ後の人ですが、その頃のギリシアの旅行案内のような本です。紀元前のソクラテス達の時代のことを、「昔はこうだった」と書いているのだけれど、この本に出てくる「現在」も、21世紀の現在からするとはるか昔のことで、ここ書かれている街も神殿も劇場も、今は廃墟になってしまっています。歴史を思い起こすと、ただただ涙です。

この本が面白いのは、今では失われてしまった絵画や彫刻や建物がまだ健在だった時代の記録だという点でしょう。こうした本の記述を頼りにしないと、古代の有様をイメージすることができないのです。たとえば、アテネの南の地中海に浮かぶアイギナ島の神殿の話が出てきます。正面の柱の上に据えられた破風の彫刻群がどうのこうの、その配置が見事だのなんだの、と記されています。この神殿も、今では廃墟と化していて、跡形もありません。けれども、神殿を飾っていた彫刻群は、実はドイツのミュンヘンに運ばれ、その地の古代彫刻館 (Glyptothek) に展示されています。現地は廃墟、でも、作品ははるか離れたドイツで健在なのです。

しかも、この彫刻館は、広い公園の中で国立古代美術館と向かい合わせに建っていて、二つの美術館の間の広場は、ナチスがその昔「有害図書」を焚書したその場所でした。通りを一本隔てた向かい側は元のナチス党本部です。これが今はミュンヘン音楽大学と美術史中央研究所になっています。この訳書を紐解くと、こうした2000年にわたる歴史の重みがのしかかってくるのでした。

18世紀・19世紀の思想家や美術史家が古代ギリシアについて語るときのネタは殆どこの本に拠っていると言っていいでしょう。プラトンやアリストテレスやギリシア悲劇といった資料には、思想や詩は書かれているけれど、ビジュアライズできるような物や風景の描写がほとんどないので、後代の名所旧跡案内である本書くらいしか、使える資料がないのです。

『ギリシア記』は、馬場恵二訳で岩波文庫から『ギリシア案内記』(上・下)としても出版されていますが、岩波文庫版は抄訳です。全部読みたい場合は、飯尾都人訳の『ギリシア記』に当たるしかありません。ただし、古本屋さんで探さないといけません。

私には夢がある M・L・キング説教・講演集

梶原寿監訳
新教出版社

真夜中に戸をたたく キング牧師説教集

梶原寿訳
日本キリスト教団出版局

この冬、マーティン・ルーサー・キング・ジュニア（キング牧師）の本を何冊かまとめて読み返している。その影響で、このところ通勤時には、キング牧師のスピーチ CD が車のなかで響いている。エンジンをかけると、アメリカの 1960 年代の時空が小さな軽自動車のなかに広がり、すっかりなじみになったキングの「声」が、敏感に反応する聴衆たちの合いの手とともに、だんだん盛り上がっていく。新潟の雪のなかを熱くなった心と軽自動車走っていく。

いくつか、印象深いスピーチを紹介しよう。有名な「ベトナムを超えて（Beyond Vietnam）」や「ここからどこへいくのか？（Where Do We Go from Here?）」はやっぱりいい（『私には夢がある』所収）。両方とも彼が暗殺される前年の 1967 年のスピーチで、ここにはベトナム戦争のみならず、アメリカの帝国主義や資本主義体制を正面から批判するラディカルなキングがいる。人種差別なき世界を夢見る「ドリーマー」としてのキングではなく、経済的搾取とレイシズムと戦争を相互に関連する三位一体の「悪」としてつかみ、アメリカの社会構造の根本的な変革（レヴォリューション）を叫んでいるキングだ。「ここからどこへいくのか？」、おれは大学へ仕事にいくのだけど…と独り言をいいながらも、心が熱くなる。

もうひとつ、「完全なる人生の三つの次元（The Three Dimensions of A Complete Life）」という説教もいい（『真夜中に戸をたたく』所収）。キングは、完全な人生とは 3 次元なのだと語り、人の道として、自己自身を愛すること、他者を愛すること、そして、神を信じることを説く。言葉にすると平凡に聞こえるかもしれないが、奇跡的な勇気を必要とする道だ。人間の尊厳が否定される現場で、ひとり声をあげるとき、人はおそらくこの三つで一つの革命的 3 次元を生きているのだろうと思う。おっと、信号が青だ。

気に入ったスピーチや説教をみつけたら、ぜひ英語の原文でも読んでほしい（研究室でコピーをさしあげます）。言葉にリズムがあり、質感が感じられるから。そして、実際のマーティンの息遣いを録音でも聞いてほしい。キングの声に、教会に集った黒人聴衆たちの熱気とレスポンスが重なり、冷たくなった現実がとけていくと思う。

緑の天幕

リュドミラ・ウリツカヤ

前田和泉訳

新潮社(2021)

一見、短編小説の連作のような体裁なのですが、個々の章は、独立したお話になっているのと同時に、長く複雑な物語のパーツとしても重要な役割を果たして、読み終わると、まぎれもない長編小説になっていることがわかります。たくさんの魅力的な人物の、出会いと別れ、愛と死、悲劇と喜劇があざやかに描かれています。登場人物たちは、いろいろな形でつながっていて、ある箇所ですんでしまった人物が、かなり先の章に再登場したりもします。一般的な小説のように、ストーリーが一方向に進むのではなく、二次元的な広がりがあり、たとえるなら、極細の糸を使って織りあげられた巨大なタペストリーのような小説、という感じでしょうか。ざっと眺めただけでは、なかなか全体像がつかめないのですが、目を近づけて模様を読み解くと、ただ引き込まれるばかりです。

そして、2022年3月という今、この本を手にとると、本の厚さゆえの重さをはるかに上回る、全身で受け止めなければならないような重量を感じます。それは、この本を貫くテーマが、「ソ連時代とは何だったのか」というものだからです。「ソ連」は、いうまでもなく、20世紀初頭に、革命と壮絶な内戦を経て成立した、地上で初の社会主義国家で、世界のおよそ半分を支配する、まぎれもない超大国でしたが、1991年に解体され、地図からは姿を消しました。30年前、国の名は「ロシア」に戻り、新しい国として歩み始めたはずでした。巨大な抑圧装置であることをやめ、人間を大切にす国になっていくことを、多くの人が願い、目指していただろうと思います。しかし、今私たちに突き付けられているのは、歴史というものが、これほど簡単に後戻りするものなのだ、という現実です。ソ連時代を描いたすぐれた文学作品は、枚挙にいとまがないほどたくさんあり、多くの人がそれを読みながら、深く自省したはずなのですが、それでもなおこの事態を防げなかったなら、長く記憶し、深く考えることが苦手な私たち日本人は、歴史を戻さないためには何をしなければならないのか、ということも考えずにいられません。

戦争がどのような形で終わるにせよ、この先に待ち受けているのが苦難の道であることは間違いありません。そんな時にも、このような優れた作家を輩出していることが、多くの人にとって救いとなることを祈りつつ、何度も読み返したいと思います。

特別付録

「どこでもドアのかぎ」バックナンバー 推薦書一覧

1997年の創刊以来、たくさんの教職員からの推薦書を掲載してきましたが、その数は今号でついに1,000冊を超えました。

次ページ以降は、過去の推薦書を一覧表にしてあります。推薦者ごとにまとめ、名字のあいうえお順に並べています。記載しているのは、書名と著者名、収録号だけです。推薦文は、図書館収蔵のバックナンバーをご覧ください。（創刊号だけは、推薦文のない、書名だけの推薦もありますが、第二号以降は、基本的にすべて推薦文が添えられています。）

なお、2008年3月（第12号）までとそれ以降では、号数のつけ方が異なります。発行号と発行年月をまとめると、以下のようになります。

どこでもドアのかぎ	1997年3月	どこでもドアのかぎ 12	2008年3月
どこでもドアのかぎ 2	1998年3月	どこでもドアのかぎ 2010	2010年3月
どこでもドアのかぎ 3	1999年3月	どこでもドアのかぎ 2011	2011年3月
どこでもドアのかぎ 4	2000年3月	どこでもドアのかぎ 2012	2012年3月
どこでもドアのかぎ 5	2001年3月	どこでもドアのかぎ 2013	2013年3月
どこでもドアのかぎ 6	2002年3月	どこでもドアのかぎ 2016	2016年3月
どこでもドアのかぎ 7	2003年3月	どこでもドアのかぎ 2017	2017年3月
どこでもドアのかぎ 8	2004年3月	どこでもドアのかぎ 2018	2018年3月
どこでもドアのかぎ 9	2005年3月	どこでもドアのかぎ 2019	2019年3月
どこでもドアのかぎ 10	2006年3月	どこでもドアのかぎ 2021	2021年3月
どこでもドアのかぎ 11	2007年3月	どこでもドアのかぎ 2022	2022年3月

青木周三	国際教養学科 (短大)	
文章の書き方	辰濃和男	01(1997)
孔子	井上靖	01(1997)
日本人と日本文化	司馬遼太郎・ドナルド・キーン (対談)	01(1997)
John Adamson	国際地域学部	
Pocahontas	Tim Vicary	2010
姉齒暁	生活科学科 生活福祉専攻 (短大)	
人間を幸福にしない日本というシステム	カレル・ヴァン・ウオルフレン	01(1997)
なぜ世界の半分が飢えるのか	スーザン・ジョージ	01(1997)
コメの話	井上ひさし	01(1997)
日本国憲法の精神	渡辺洋三	01(1997)
カプトガニの不思議	関口晃一	01(1997)
「血液型と性格」の社会史 (血液型を信じているあなたへ)	松田 薫	02(1998)
私の「漱石」と「龍之介」	内田百閒	03(1999)
荻原守衛 忘れえぬ芸術家 上下	林 文雄	03(1999)
ゲルニカ物語 -ピカソと現代史-	荒井 信一	03(1999)
心に刻む歴史 ドイツと日本の戦後 50 年 ワイツゼッカー前独大統領講演全録	東京新聞戦後 50 年取材班編	04(2000)
ゆたかな国をつくる 官僚専権を超えて	宇沢弘文	04(2000)
人はなぜ騙されるのか 非科学を科学する	安斉育郎	04(2000)
不安社会を生きる	内橋克人	05(2001)
沈まぬ太陽 (3部構成全5巻)	山崎豊子	05(2001)
荒木和華子	国際地域学部	
塩を食う女たち―聞書・北米の黒人女性	藤本和子	2011
アメリカ合衆国と中国人移民--歴史のなかの「移民国家」アメリカ	貴堂嘉之 (きどうよしゆき)	2012
ダロウェイ夫人	ヴァージニア・ウルフ (丹治愛訳)	2013
希望は絶望のど真ん中に	むのたけじ	2013
ソーシャルワークはマイノリティをどう捉えてきたのか―制度的人種差別とアメリカ社会福祉史	西崎緑	2021
「関さんの森」の軌跡―市民が育む里親が地球を救う	関啓子	2021
ハリエット・タブマン―「モーゼ」と呼ばれた黒人女性	上杉忍	2021
私とあなたのあいだ―いま、この国で生きるということ	温又柔、木村友祐	2021
ショック・ドクトリン―惨事便乗型資本主義の正体を暴く上・下	ナオミ・クライン	2021

ジェンダーについて大学生が真剣に考えてみた—あなたがあなたらしくいられるための 29 問	一橋大学社会学部佐藤文香ゼミ生— 同	2021
環状島 = ト라우マの地政学	宮地尚子	2021
飯田規和	国際教養学科・学長 (短大)	
罪と罰	ドストエフスキー	01(1997)
検察官	ゴーゴリ	01(1997)
現代の英雄	レールモントフ	01(1997)
復活	トルストイ	01(1997)
おろしや国酔夢譚	井上靖	02(1998)
シベリア追跡	椎名誠	02(1998)
石井玲子	幼児教育学科 (短大) / 人間生活学部 子ども学科	
ボクの音楽武者修行	小沢征爾	10(2006)
恋	小池真理子	10(2006)
博士の愛した数式	小川洋子	10(2006)
憲法九条を世界遺産に	太田光、中沢新一	11(2007)
よるくま (絵本)	酒井駒子	2012
「クラシック音楽」はいつ終わったのか? - 音楽史における第一次世界大戦の前後 -	岡田暁生	2012
小澤征爾さんと、音楽について話をする	小澤征爾・村上春樹	2012
直観力	羽生善治	2013
悩む力	姜尚中	2013
若き数学者のアメリカ	藤原正彦	2013
ボクの音楽武者修行	小澤征爾	2013
アウシュビッツの音楽隊	シモン・ラックス、ルネ・クーディ	2016
石垣健二	幼児教育学科 (短大)	
ことばが劈かれるとき	竹内敏晴	05(2001)
吾輩八苦手デアル	原田宗典	05(2001)
「わかる」ということの意味	佐伯胖	06(2002)
他力	五木寛之	06(2002)
新しい歴史教科書 (市販本)	西尾幹二 (代表)	06(2002)
リング	鈴木光司	07(2003)
子どもたちはなぜキレるのか	斎藤孝	07(2003)
「あと一球っ!」の精神史 - 阪神ファンとして生きる意味 -	井上章一	08(2004)
14 歳からの哲学 - 考えるための教科書 -	池田晶子	08(2004)

自分の顔が許せない！	中村うさぎ 石井政之	09(2005)
かもめのジョナサン	リチャード・バック	09(2005)
石川伊織	国際教養学科（短大）／国際地域学部	
ファンシイダンス（コミック）	岡野玲子	01(1997)
陰陽師（コミック）	岡野玲子	01(1997)
バリ燃ゆ	大仏次郎	01(1997)
キャナリー・ロウ〈缶詰横町〉	スタインベック	01(1997)
古典教養そこつ講座	夏目房之介	01(1997)
アニメーションの色職人	柴口育子	02(1998)
明和電機 魚器図鑑	土佐正道・土佐信道	02(1998)
ぼくらの鉱石ラジオ	小林健二	02(1998)
野草	魯迅著 竹内好訳	02(1998)
カテドラル	デビット・マコーレイ	02(1998)
天球図の歴史	ピーター・ウィットフィールド	02(1998)
薔薇の名前（上下）	ウンベルト・エーコ	02(1998)
名作（1・2）	夏目房之介	02(1998)
日本文学全集	清水義範	02(1998)
カント・アンジェリコ	高野史緒	02(1998)
全国アホ・バカ分布考	松本修	03(1999)
時の娘	ジョセフィン・テイ	03(1999)
怒涛の虫	西原理恵子	03(1999)
コーヒーハウス物語	ハンス＝ヨアヒム・シュルツェ	03(1999)
道楽科学者列伝	小山慶太	03(1999)
コペルニクス革命	トーマス・クーン	03(1999)
三酔人経綸問答	中江兆民	03(1999)
恋する女たち	氷室冴子	03(1999)
貨幣とは何だろうか	今村仁司	03(1999)
ファウスト	J.W.ゲーテ	04(2000)
ファウスト	手塚治虫	04(2000)
ネオ・ファウスト	手塚治虫	04(2000)
とんかつの誕生 明治洋食事始め	岡田哲	05(2001)
新約聖書はなぜギリシア語で書かれたか	加藤隆	05(2001)
新約聖書の誕生	加藤隆	05(2001)

田宮模型の仕事	田宮俊作	05(2001)
たんぼぼのお酒	レイ・ブラッドベリ	05(2001)
幕府天文方御用 伊能測量隊まかり通る	渡邊一郎	05(2001)
君たちはどう生きるか	吉野 源三郎	05(2001)
紅一点論	斎藤美奈子	06(2002)
教養としての〈まんが・アニメ〉	大塚英志+ササキバラ・ゴウ	06(2002)
忍ひもせず	杉浦日向子	06(2002)
文壇アイドル論	斎藤美奈子	07(2003)
妊娠小説	斎藤美奈子	07(2003)
ソウル ファイター	木村彩日香	07(2003)
須賀敦子のミラノ	大竹昭子	07(2003)
須賀敦子のヴェネツィア	大竹昭子	07(2003)
須賀敦子のローマ	大竹昭子	07(2003)
ミラノ 霧の風景	須賀敦子	07(2003)
ニッポン近代化遺産の旅	増田彰久・清水慶一	07(2003)
都市の記憶 美しいまちへ	鈴木博之ほか	07(2003)
家族革命前夜 (家族革命イブ)	賀茂美則	08(2004)
モダンガール論	斎藤美奈子	08(2004)
お姫様とジェンダー	若桑みどり	08(2004)
お父さん、怒鳴らないで	毎日新聞家庭生活部編	08(2004)
天才柳沢教授の癒セラピィ	川崎克哲+山下和美	08(2004)
横書き登場——日本語表記の近代——	屋名池誠	08(2004)
スタンウェイ物語	R.K.リーバーマン	08(2004)
大人は判ってくれない	野火ビタ=榎本ナリコ	08(2004)
はじめての雅楽	笹本武志	08(2004)
大江戸透絵図——千代田から江戸が見える	北原進監修+千代田区江戸開府 400年記念事業実行委員会	08(2004)
縁日お散歩図鑑	オオカワヨウコ	09(2005)
棟梁たちの西洋館	増田彰久	09(2005)
秩父事件	秩父事件研究顕彰会 (編)	09(2005)
定刻発車	三戸裕子	09(2005)
サヨナラ、学校化社会	上野千鶴子	09(2005)
私たちの独立起業ヒストリー-in 新潟	ワーキングウィメンズアソシエーション (編著)	09(2005)
上司は思いつきでものを言う	橋本治	09(2005)

永遠平和のために	イマヌエル・カント	09(2005)
華氏 451 度	レイ・ブラッドベリ	09(2005)
<女中> イメージの家庭文化史	清水美知子	09(2005)
グロテスクな教養	高田理恵子	10(2006)
<いい子> じゃなきゃいけないの?	香山リカ	10(2006)
パズルランドのアリス I・II	レイモンド・M・スマリヤン	10(2006)
貧困の克服——アジア発展の鍵は何か	アマルティア・セン	10(2006)
のだめカンタービレ 既刊 1~14 巻	二ノ宮知子	10(2006)
大奥 第一巻	よしながふみ	10(2006)
ハイネ詩集	ハインリッヒ・ハイネ	10(2006)
エリュアール詩集	ポール・エリュアール	10(2006)
方丈記	鴨長明	11(2007)
ルバイヤート	オマル・ハイヤーム	11(2007)
アンティゴネー	ソポクレーズ	11(2007)
変身・断食芸人	フランツ・カフカ	11(2007)
李陵・山月記・弟子・名人伝	中島敦	11(2007)
地獄の季節	アルチュール・ランボオ	11(2007)
ベニスに死す	トーマス・マン	11(2007)
職業としての学問	マックス・ヴェーバー	11(2007)
舞姫・うたかたの記	森鷗外	11(2007)
女は見た目が 10 割 誰のために化粧をするのか	鈴木由加里	11(2007)
壊れる男たち—セクハラはなぜ繰り返されるのか	金子雅臣	11(2007)
ショコラ	ジョアン・ハリス	12(2008)
ジョン・レノンを聴け!	中山康樹	12(2008)
高校生のためのメディア・リテラシー	林直哉	12(2008)
バリバリのハト派 女子供カルチャー反戦論	荷宮和子	12(2008)
まるごとパリの撮り歩き	星野秀夫	12(2008)
ハイネ詩集	ハインヒ・ハイネ	12(2008)
レヴィンの水車	ヨハネス・ボブロウスキー	12(2008)
実存主義とは何か	J. P. サルトル	12(2008)
春画のからくり	田中優子	2010
カムイ伝講義	田中優子	2010
コスプレ——なぜ、日本人は制服が好きなのか	三田村路子	2010

図説 都市と建築の近代 プレ・モダニズムの都市改造	永松栄	2010
ヤマありタニおり	日下直子	2010
Flat 第一巻～第三巻	青桐ナツ	2010
ユリイカ 2008年12月臨時増刊号 総特集「初音ミク ネットに舞い降りた天使」	2010	
江戸名所図会（全六巻＋別巻二）		2010
レインツリーの国	有川浩	2011
江戸絵画の不都合な真実	狩野博幸	2011
史料を読み解く 4 幕末・維新の政治社会	鈴木淳・西川誠・松沢裕作編	2011
一丁 倫敦と丸の内スタイル 三菱一号館からはじまる丸の内の歴史と文化	岡元哲志監修	2011
甥の一生 第一巻～第三巻	西炯子	2011
空想お料理読本	ケンタロウ×柳田理科雄	2011
パラディオのローマ 古代遺跡・教会案内	パラディオ	2012
ジャック・ルーボアの極私的東京案内	ジャック・ルーボア	2012
タモリの TOKYO 坂道美学入門	タモリ	2012
The Long Goodbye	Raymond Chandler	2012
長いお別れ	清水俊二訳	2012
ロング・グッドバイ	村上春樹訳	2012
原発依存と地球温暖化論の策略	中野洋一	2012
関東大震災・日本国有鉄道震災日誌	鉄道省編・老川慶喜解題	2012
エロティック・ジャポン	アニエス・ジアール にしむらじゅんこ訳	2012
きのう何食べた？（1－5）	よしながふみ	2012
美貌の果実：川原泉傑作集	川原泉	2012
納豆の研究法	村松芳多子他	2012
珈琲時間	豊田徹也	2012
かもめ食堂	群ようこ	2012
村上レシピ	岡本一南	2012
化粧男子 男と女、人生を2倍楽しむ方法	井上魅夜	2013
股間若衆 男の裸は芸術か	木下直之	2013
<通訳> たちの幕末維新	木村直樹	2013
芭蕉紀行文集 付 嵯峨日記	松尾芭蕉（中村俊定校注）	2013
東京遺産——保存から再生・活用へ——	森まゆみ	2013
エキゾチック・パリ案内	清岡智比古	2013

旅してみたい 日本の鉄道遺産	三宅俊彦	2013
センチメンタル・ジャーニー	ロレンス・スターン (松村達雄訳)	2013
ウィーン——ある都市の物語——	池内紀	2013
講談社 オランダ語辞典	P.G.J. van Sterkenburg / E.J. Boot	2016
キャロル	パトリス・ハイスミス	2016
方丈記	鴨長明	2016
永遠平和のために	イマヌエル・カント	2016
君主論	ニコロ・マキアヴェッリ	2016
完訳 統治二論	ジョン・ロック	2016
社会契約論	ジャン・ジャック・ルソー	2016
国家と革命	レーニン	2016
モーツァルトとナチス 第三帝国による芸術の歪曲	エリック・リーヴィー	2016
「中つ国」歴史地図 トールキン世界のすべて	カレン・フォン・フォンスタッド	2017
十七世紀のオランダ人が見た日本	クレインス・フレデリック	2017
モンタヌスが描いた驚異の王国 おかしなジバング 図版帳	宮田珠己	2017
レンブラントと和紙	貴田庄	2017
プトレマイオス世界図——大航海時代への序章 ——Clavdii Ptolemaei COSMOGRAPHIA TABVLAE	L.バガーニ (解説)、竹内啓一 (翻 訳)、織田武雄・高橋正・船越昭 生・増田義郎 (日本語解説)	2017
天体の回転について (1543年)	ニコラウス・コペルニクス	2017
無限、宇宙および諸世界について (1584年)	ジョルダノ・ブルーノ	2017
ケプラーの夢 (1608年)	ヨハネス・ケプラー	2017
星界の報告 (1610年)	ガリレオ・ガリレイ	2017
天文対話 (1632年)	ガリレオ・ガリレイ	2017
江戸東京たても園 解説本 収蔵建造物のくら しと建築	江戸東京たても園	2018
地図で読む戦争の時代 描かれた日本、描かれ なかった日本	今尾恵介	2018
日本史を学ぶための〈古代の暦〉入門	細井浩志	2018
新潟市民文化遺産 ガイドブック	新潟市 (?)	2018
はじめアルゴリズム (第1巻・第2巻)	三原和人	2018
てっぺん (第1巻)	日下直子	2018
美少女の美術史	「美少女の美術史」展実行委員会編	2018
仏果を得ず	三浦しをん	2018
君たちはどう生きるか	吉野源三郎	2018

エゾモモンガ——アッカムイの森に生きる—— 目黒誠一写真集	目黒誠一	2018
考える日本史	本郷和人	2019
高野聖・眉かくしの霊	泉鏡花	2019
センネン画報 + 10Years	今日マチ子	2019
銭湯と横浜	横浜開港資料館・横浜市歴史博物館 (編)	2019
みんなうち (かがくのとも傑作集)	五味太郎	2019
走れ ひばく電車	まさきかずみ (文) ・しげとうさちよ (絵)	2019
大学論 いかに関え、いかに学ぶか	大塚英志	2021
経済学・哲学草稿	カール・マルクス	2021
ウンコはどこから来て、どこへ行くのか	湯澤規子	2021
水都 東京——地形と歴史で読みとく下町・山の手・郊外	陣内秀信	2021
古地図で見る京都 『延喜式』から近代地図まで	金田章裕	2021
ロマネスクとは何か——石とぶどうの精神史	酒井健	2021
声の物語	クリスティーナ・ダルチャー、市田泉訳	2021
路面電車すごろく散歩	鈴木さちこ	2021

石栗彩子

英文学科 (短大)

万延元年のフットボール	大江健三郎	02(1998)
城	カフカ	02(1998)
インディヴィジュアル・プロジェクション	阿部和重	02(1998)
悲劇の誕生	ニーチェ	02(1998)
性の歴史〈1〉 知への意志	フーコー	02(1998)
ドストエフスキーの詩学	ミハイル・バフチン	03(1999)
反復	キルケゴール	03(1999)
探求 I	柄谷行人	03(1999)
ニャーンズ・コレクション	赤瀬川原平	04(2000)
フェミニズム	竹村和子	05(2001)
指輪物語	J.R.R.トールキン	06(2002)
侍女の物語	マーガレット・アトウッド	08(2004)
知識人とは何か	エドワード・サイード	09(2005)

石原和夫

生活科学科 食物栄養専攻 (短大)

食糧パニック	浅井隆	01(1997)
食の新視点・ライフサイエンスとしての栄養学	木村 修一	02(1998)

一日江戸人	杉浦日向子	11(2007)
生き方 (人間として一番大切なこと)	稲盛和夫	11(2007)
永遠平和のために・カント	Immanuel Kant	12(2008)
食糧争奪	柴田明夫	12(2008)
石本勝見	生活科学科 生活福祉専攻 (短大) / 人間生活学部 子ども学科	
プロカウンセラーの聞く技術	東山紘久	08(2004)
板垣俊一	国際教養学科 (短大) / 国際地域学部	
歌を忘れた日本人	小島美子	01(1997)
中村久子の生涯・四肢切断の一生	黒瀬次郎	02(1998)
こども風土記・母の手毬歌	柳田国男	03(1999)
わが住む村	山川菊栄	04(2000)
ハーメルンの笛吹き男	阿部 謹也	05(2001)
曠野の花 —石光真清の手記②—	石光真清	06(2002)
肉食の思想 —ヨーロッパ精神の再発見—	鯖田豊之	07(2003)
人間社会の形成	今西錦司	09(2005)
百人一首を楽しくよむ	井上宗雄	09(2005)
1492年のマリア	西垣 通	10(2006)
和本入門：千年生きる書物の世界	橋口侯之介	11(2007)
中国の赤い星	エドガー・スノー	2010
日本語が亡びるとき —英語の世紀の中で	水村美苗	2011
夢酔独言	勝 小吉	2012
フランス農村物語	池本喜三夫	2012
完本八犬伝の世界	高田衛	2013
江戸期視覚文化の創造と歴史的展開—覗き眼鏡とのぞきからくり—	板垣俊一	2013
猪口孝	学長	
トンボとエダマメ論	猪口 孝	2010
英語は道具力	猪口 孝	2010
タンポポな生き方	猪口 孝	2010
植木信一	生活科学科 生活福祉専攻 (短大) / 人間生活学部 子ども学科	
どんぐりの家 (コミック)	山本おさむ	01(1997)
コルチャック先生	近藤二郎	02(1998)
教育とは何か	大田堯	03(1999)

働くこと育てること	落合由利子	08(2004)
そこにいますか 日常の短歌	穂村弘	12(2008)
太田正之	英文学科(短大) / 国際地域学部	
裏日本--近代日本を問いなおす	古厩 忠夫	02(1998)
反常識講座	渡辺淳一	05(2001)
オーストラリア6000日	杉本良夫	2011
大人の英語発音講座	英語音声学研究会	2011
日本を、信じる	瀬戸内寂聴 ドナルド・キーン	2013
発見の興奮--言語学との出会い--	中島平三	2013
ハワイ紀行完全版	池澤夏樹	2013
音とことばのふしぎな世界--メイド声から英語の達人まで	川原繁人	2016
翻訳夜話	村上春樹・柴田元幸	2018
ロックの英詩を読む	ピーター・バラカン	2018
15歳のコーヒー屋さん 発達障害のほくができることから ほくにしかできないことへ	岩野 響	2019
わたしの日本語修行	ドナルド・キーン 河路由佳	2019
おやすみなさいのほん	マーガレット・ワイズ・ブラウン ぶん	2019
フォックスウッドものがたり4 ひみつがいっぱい	シンシア&ブライアン・パターソン 作・絵	2019
わすれられないおくりもの	スーザン・バーレイ さく え	2019
ぼくらは赤いうたさぎ	文 大津由紀雄	2019
おとうさんはまんねんひつ	文 大津由紀雄	2019
パジャマおばけのおばけパジャマ	文 大津由紀雄	2019
つかまったのはだれ?	文 大津由紀雄	2019
太田優子	生活科学科 食物栄養専攻(短大) / 人間生活学部 健康栄養学科	
星の王子さま	サン・テグジュペリ	02(1998)
少年H	妹尾河童	02(1998)
美味礼賛(上・下)	ブリア・サヴァラン	03(1999)
複合汚染	有吉佐和子	03(1999)
アンダーグラウンド	村上春樹	04(2000)
二十歳のころ	立花隆+東京大学教養学部立花隆ゼミ	04(2000)
世界がもし100人の村だったら	池田香代子 再話 C.ダグラス・スミス 対訳	06(2002)
茨木のり子 現代の詩人7	茨木のり子	09(2005)
東京奇譚集	村上春樹	12(2008)

幸福な食卓	瀬尾まいこ	2010
対訳 21世紀に生きる君たちへ	司馬 遼太郎 (著), Donald Keene (監訳)	2010
星の王子さま—オリジナル版	サン＝テグジュペリ	2011
戦下のレシピ—太平洋戦争下の食を知る	斎藤 美奈子	2011
小川未明童話集	小川 未明	2013
生きるのが楽しくなる 15 の習慣	日野原重明	2013
あのひのこと—Remember March 11.2011	葉 祥明	2013
たいせつなこと	マーガレット・ワイズ・ブラウン (1910年～1952年) さく	2019
開運えほん	かんべ あやこ (1956年～) さく	2019

大橋儀隆

英文学科 (短大)

福翁自伝	福沢諭吉	01(1997)
日本の思想	丸山真男	01(1997)
ユダヤ人	J.P.サルトル	02(1998)
歴史の暮方	林達夫	03(1999)
王朝物語	中村真一郎	03(1999)
ヨーロッパのキリスト教美術	エミール・マール	04(2000)
人生をいかに生きるか	林 語堂	04(2000)
詩を読む若き人々のために	C.D.ルース	05(2001)
英国の文学	吉田健一	05(2001)
英国史 (上下)	アンドレ・モロワ	05(2001)

大桃伸一

幼児教育学科 (短大) / 人間生活学部 子ども学科

人間をみつめて	神谷美恵子	01(1997)
太陽の子	灰谷健次郎	01(1997)
自立にむかう旅	乾彰夫	01(1997)
生きがいについて	神谷美恵子	02(1998)
太陽の子	灰谷健次郎	02(1998)
だから、あなたも生きぬいて	大平光代	05(2001)
最後の瞽女—小林ハルルの人生—	桐生清次	05(2001)
兎の眼	灰谷健次郎	11(2007)
夜回り先生	水谷修	11(2007)
夜回り先生	水谷修	2013
日本百名山	深田久弥	2013
日本百名山 登山ガイド上・中・下	山と溪谷社編	2013

岡村仁一	英文学科（短大）	
欲望という名の電車	テネシー・ウィリアムズ著 小田島雄志訳	02(1998)
八月の光	フォークナー	03(1999)
シスター・キャリー（上）（下）	ドライサー	04(2000)
小澤薫	生活科学科 生活福祉専攻（短大）／ 人間生活学部 子ども学科	
虚構の樂園	ズオン・トゥー・フォン	10(2006)
現状報告 路上に生きる命の群—ホームレス問題 の対策と提案—	宮下忠子編	10(2006)
どん底の人びと ロンドン 1902	ジャック・ロンドン	11(2007)
ヘブンシヨップ	デボラ・エリス	11(2007)
食品の裏側	安部司	11(2007)
「福祉」が人を殺すとき	寺久保光良	12(2008)
若者が働くとき	熊沢誠	12(2008)
泥の河 蛍川 道頓堀川	宮本輝	2010
福祉が人を生かすとき	建石一郎	2011
釜ヶ崎のスヌメ	原口剛・稲田七海・白波瀬達也・平川 隆啓 編著	2012
「大量失業社会」の労働と家族生活	都留民子編著	2013
きけわだつみのこえ	日本戦没学生記念会	2016
コンビニ人間	村田沙耶香	2017
健康で文化的な最低限度の生活	柏木ハルコ	2018
めっきらもつきらどんどん	長谷川摂子 作	2019
11 びきのねこ	馬場のぼる	2019
かわ	加古里子 さく／え	2019
へいわってすてきだね	詩 安里有生	2019
花ばあば	クオン・ユンドク 絵／文	2019
ボブという名のストリート・キャット	ジェームズ・ボーエン	2021
むこう岸	安田夏菜	2021
小谷一明	英文学科（短大）／国際地域学部	
彼らの目は神を見ていた	ゾラ・ニール・ハーストン	05(2001)
パラダイス	トニ・モリスン	05(2001)
恥辱	J. M. カッツェー	06(2002)
妾の半生涯	福田英子	06(2002)
祖母のくに	ノーマ・フィールド	06(2002)

祭りの場;ギヤマンビードロ	林京子	07(2003)
魂込め (まぶいぐみ)	目取真俊	07(2003)
命こそ宝〜沖縄反戦の心	阿波根昌鴻	08(2004)
日本三文オペラ	開高健	08(2004)
魂の流れゆく果て	梁石日 (ヤンソギル)	09(2005)
石牟礼道子全集 第1巻	石牟礼道子	09(2005)
Sister Outsider	Audre Lorde	09(2005)
ナインインタビューズ 柴田元幸と9人の作家たち (CD付き)		09(2005)
枯木灘	中上健次	10(2006)
エプロンのうた	香山末子	10(2006)
蟹工船・一九二八・三・一五	小林多喜二	10(2006)
私は「蟻の兵隊」だった：中国に残された日本兵	奥村和一他	11(2007)
「砂」『洲之内徹小説全集』	洲之内徹	11(2007)
「濁水溪」『香港・濁水溪』	邱永漢	11(2007)
テロル	ヤスミナ・カドラ	12(2008)
暗闇のなかの希望	レベッカ・ソルニット	12(2008)
凍える口	金鶴泳	12(2008)
息吹、まなざし、記憶	エドウィッジ・ダンテカット	2010
アフター・ザ・ダンスーハイチ、カーニヴァルへの旅	エドウィージ・ダンティカ	2010
愛するものたちへ、別れのとき	エドウィージ・ダンティカ	2010
半分のぼった黄色い太陽	チママンダ・ングズィ・アディーチェ	2011
海炭市叙景	佐藤泰志	2011
死刑台から教壇へー私が体験した韓国現代史	康宗憲	2011
HIROSHIMA	小田実	2012
原爆の子 (上下)	長田新 編	2012
ホルモン奉行	角岡伸彦	2012
母をお願い	申京淑 (安宇植訳)	2013
オンドル夜話ー現代両班考	尹学準	2013
モモ	ミハエル・エンデ	2013
平さんの天空の棚田ー写真絵本・祝島のゆるがぬ 暮らし第1集	那須圭子	2013
チェルノブイリの祈りー未来の物語	スベトラーナ・アレクシエービッチ	2016
深沢夏衣作品集	深沢夏衣	2016
ひとかどの父へ	深沢潮	2016

時間	堀田善衛	2016
千の輝く太陽	カーレド・ホッセイニ	2016
テロ	フェルディナント・フォン・シーラッハ	2017
ジャッカ・ドフニ 海の記憶の物語	津島佑子	2017
嘘つきアーニヤの真っ赤な真実	米原万里	2017
あるときの物語（上下巻）	ルース・オゼキ	2017
山之口獏詩集	山之口獏	2017
ブルトニウムの恐怖	高木仁三郎	2017
夜の谷を行く	桐野夏生	2018
人間滅亡的人生案内	深沢七郎	2018
男も女もみんなフェミニストでなきゃ	チママンダ・ンゴズィ・アディーチェ	2018
ソヴィエト・ファンタスチカの歴史	ルスタム・スヴャトスラーヴォヴィチ	2018
私たちの星で	梨木香歩・師岡カリマ・エルサムニー	2018
五色の虹 満州建国大学卒業生たちの戦後	三浦英之	2018
広島に会いに行く	石田優子	2018
うつろ舟 ブラジル日本人作家松井太郎小説選	松井太郎	2018
中国が愛を知ったころ—張愛玲短篇選	張愛玲	2018
オオカミ王 ロボ（シートン動物記）	アーネスト・T・シートン	2018
聖地 Cs	木村友祐	2018
祈り	ヴァジャ・ブシャヴェラ	2019
海うそ	梨木香歩	2019
世界で最も乾いた土地—北部チリ、作家が迎える砂漠の記憶（ナショナルジオグラフィック・ディレクションズ）	アリエル・ドーフマン	2019
ただの文士	堀田百合子	2019
夜の森（堀田善衛全集 2 所収）	堀田善衛	2019
一週間	井上ひさし	2019
猟銃・愛についてのデッサン（野呂邦暢小説集成 6）	野呂邦暢	2019
紀州 木の国・根の国物語	中上健次	2019
みな、やっとの思いで坂をのぼる 水俣病患者相談のいま	永野三智	2019
ある台湾知識人の悲劇 中国と日本のはざまで 葉盛吉伝	楊威理	2019
自転車泥棒	呉明益	2019
軍旗はためく下に	結城昌治	2019

樹影	佐多稲子	2019
密航定期便	中園英助	2019
第四間氷期	安部公房	2019
増補 遙かなる故郷 ライと朝鮮の文学	村松武司	2019
戦火のなかの子どもたち(創作絵本 14)	岩崎ちひろ	2019
花ばあば	クオン・ユンドク	2019
ナラ・レポート 津島佑子コレクション	津島佑子	2021
隔離 増刷版	徳永進	2021
海女たち—愛を抱かずしてどうして海に入れようか	許榮善	2021
獄本あゆ美戯曲集「太平洋食堂」:太平洋食堂/彼の借の娘—高代寛書	獄本あゆ美	2021
天皇組合	火野葦平	2021
治天之君/追憶のアリラン	古川健	2021
日本統治期台湾文学集成 30 呉濁流作品集	呉濁流	2021
トリニティ、トリニティ、トリニティ	小林エリカ	2021
アリランの歌	ニム・ウエールズ	2021
いやな感じ	高見順	2021
分解者たち—見沼田んぼのほとりを生きる	猪瀬浩平	2021
魯肉飯のさえずり	温又柔	2021
サガレン 樺太/サハリン 境界を旅する	梯久美子	2021

角張慶子

幼児教育学科(短大) / 人間生活学部 子ども学科

我らが隣人の犯罪	宮部みゆき	09(2005)
おんなのことば	茨木のり子	09(2005)
今日		2019

笠原賀子

生活科学科 食物栄養専攻(短大)

森田療法	岩井寛	02(1998)
カラースケッチ生理学	永田ほか	02(1998)
理科系の作文技術	木下是雄	03(1999)
遺伝子でできること, きまらぬこと	中込弥男	04(2000)
子どもの栄養・食教育ガイド	坂本元子編	08(2004)

金澤妙子

幼児教育学科(短大)

育ての心	倉橋惣三	01(1997)
幼稚園真諦	倉橋惣三	01(1997)
倉橋惣三 その人と思想	坂本彦太郎	01(1997)

子どもたちのいる宇宙	本田和子	01(1997)
子どもの世界をどう見るか	津守真	01(1997)
保育の体験と思索	津守真	01(1997)
子ども学のはじまり	津守真	01(1997)
人間現象としての保育研究 1～3	津守真・本田和子	01(1997)
保育の体験と思索	津守真	02(1998)
子どもの世界をどう見るか	津守真	02(1998)
大学教授そのあまりに日本人的な	桜井	02(1998)
倉橋惣三 その人と思想	坂本彦太郎	02(1998)
保育者の地平	津守真	02(1998)
育ての心	倉橋惣三	02(1998)
幼稚園真諦	倉橋惣三	02(1998)
神谷陸代	人間生活学部 子ども学科	
アルジャーノンに花束を	ダニエル・キイス	2018
花さき山	斎藤隆介・作	2019
木佐木哲朗	国際教養学科（短大）／国際地域学部	
悲しき熱帯	レヴィ=ストロース	01(1997)
イシ——北米最後の野生インディアン	T・クローバー	01(1997)
未開の顔・文明の顔	中根千枝	01(1997)
イシ・北米最後の野生インディアン	T.クローバー著 行方昭夫訳	02(1998)
女の文化人類学・世界の女性はどう生きているか	綾部恒雄編	02(1998)
日本社会の歴史 上・中・下	網野義彦	03(1999)
極北のインディアン	原ひろ子	03(1999)
バナナと日本人	鶴見 良行	05(2001)
海の帝国	白石隆	07(2003)
人間にとって法とは何か	橋爪大三郎	08(2004)
木を見る西洋人、森を見る東洋人	リチャード・E・ニスベット、村本由紀子訳	09(2005)
日本人の死のかたち	波平恵美子	11(2007)
岸井勇雄	学長（短大）	
子育て小事典	岸井勇雄	08(2004)
子育て小事典	岸井勇雄	09(2005)
子育て小事典－幼児教育・保育のキーワード－	岸井勇雄	10(2006)

権寧俊	国際教養学科（短大）／国際地域学部	
韓国の「昭和」を歩く	鄭銀淑	10(2006)
植民地朝鮮の日本人	高崎宗司	10(2006)
ワイルド・スワン（上・下）	ユン・チアン（張戎）	10(2006)
熊谷明泰	国際教養学科（短大）	
韓国語はじめての一步まえ	金 裕鴻	02(1998)
コリアン世界の旅	野村進	02(1998)
ことばと国家	田中克彦	02(1998)
アジア読本 韓国	伊藤亜人	02(1998)
朝鮮紀行－英国婦人の見た李朝末期	イザベラ・バード	03(1999)
David Coulson	英文学科（短大）／国際地域学部	
A Thousand Splendid Suns	Khaled Hosseini	12(2008)
Atonement	Ian McEwan	12(2008)
感動する脳	茂木健一郎	2011
黒田俊郎	国際教養学科（短大）／国際地域学部／副学長	
指輪物語（全6巻）	J. R. トールキン 瀬田貞二訳	02(1998)
パリ／ボナパルト街	海老坂 武	03(1999)
夜と霧－ドイツ強制収容所の体験記録－	ヴィクトール・エミール・フランクル	04(2000)
20世紀SF①：1940年代 星ねずみ	中村融・山岸真編	05(2001)
詩のこころを読む	茨木のり子	05(2001)
存在の耐えられない軽さ	ミラン・クンデラ 千野栄一訳	06(2002)
都心ノ病院ニテ幻覚ヲ見タルコト	澁澤龍彦	07(2003)
恋の映画誌	山田宏一	07(2003)
古事記の世界	西郷信綱	09(2005)
古代人と夢	西郷信綱	09(2005)
子どもたちのアフリカ	石弘之	10(2006)
移民と現代フランス	ミュリエル・ジョリヴェ	10(2006)
日本の詩歌	大岡信	10(2006)
二十歳の原点	高野悦子	11(2007)
夜の樹	トルーマン・カポーティ	11(2007)
シーシュポスの神話	アルベール・カミュ	12(2008)
1Q84（Book 1&2）	村上春樹	2010
ミーナの行進	小川洋子	2010

初級革命講座飛龍伝	つかこうへい	2011
見ることの塩：パレスチナ・セルビア紀行	四方田犬彦	2011
いまも、君を想う	川本三郎	2011
ドリナの橋	イヴォ・アンドリッチ	2012
榆家の人びと	北杜夫	2012
悪童日記	アゴタ・クリストフ	2012
クスクスの謎：人と人をつなげる粒パスタの魅力	にむらじゅんこ	2012
遺体	石井光太	2013
その日東京駅五時二十五分発	西川美和	2013
愛人 ラマン	マルグリット・デュラス	2016
これで駄目なら：若い君たちへー卒業式講演集	カート・ヴォネガット	2016
Vietnam Requiem: By the Photographers Who Died in Vietnam and Indochina	Horst Faas & Tim Page	2016
意味がなければスイングはない	村上春樹	2017
Space	Tim Vicary	2017
蜜蜂と遠雷	恩田陸	2018
九月、東京の路上で：1923 年関東大震災、ジェノサイドの残響	加藤直樹	2019
塩狩峠	三浦綾子	2021
小池由佳	生活科学科 生活福祉専攻（短大）／人間生活学部 子ども学科	
口からうんちが出るように手術してください	小島直子	10(2006)
ぶどうの木－10 人の“わが子”とすごした、里親 18 年の記録	坂本洋子	10(2006)
まあちゃんのながいかみ	たかどの ほうこ さく	2019
中国の民話 王さまと九人のきょうだい	赤羽末吉絵	2019
はなのすきなうし	おはなし マンロー・リーフ え ロバート・ローソン	2019
美女と野獣	ローズマリー・ハリス さいゆ	2019
いっさいはん	さくえ minchi (みんち)	2019
Ka Po Ng	国際地域学部	
Uncommon Grounds: The History of Coffee and How It Transformed our World.	Pendergrast, Mark	2018
後藤岩奈	国際教養学科（短大）／国際地域学部	
莊子 古代中国の実存主義	福永光司	03(1999)
日朝関係の克服	姜尚中	08(2004)
混沌からの出発	福永光司 五木寛之	08(2004)

我、自衛隊を愛す 故に、憲法 9 条を守る 防衛省元幹部 3 人の志	箕輪登、竹岡勝美、小池清彦	2010
拉致 左右の垣根を越えた闘いへ	蓮池透	2010
愛国者の条件 昭和の失策とナショナリズムの本質を問う	半藤一利 戸高一成	2010
革命家 100 の言葉	山口智司	2010
差別と日本人	野中広務、辛淑玉	2010
中国汚染 「公害大陸」の環境報告	相川泰	2010
斉藤美和子	生活科学科 生活福祉専攻（短大）／人間生活学部 子ども学科	
子どもと悪	河合 隼雄	02(1998)
坂口淳	生活科学科 生活科学専攻（短大）／国際地域学部／国際経済学部	
ヒートアイランド	齋藤武雄	02(1998)
雪はじゃまものか？	鈴木 哲	02(1998)
理科系の英語読本	志村史夫	02(1998)
データ分析はじめの一步	清水 誠	03(1999)
調べる・身近な環境	小倉紀雄、梶井公美子、藤森真理子、山田和人	04(2000)
やってみよう縄文人生活 課外授業ようこそ先輩別冊	岡本道雄 NHK「課外授業 ようこそ先輩」制作グループ	06(2002)
櫻井慶一	生活科学科 生活福祉専攻（短大）	
福祉の思想	糸賀一雄	01(1997)
桜沢祐子	コンピュータ演習室	
渡辺壮の宇宙人	福島 智	02(1998)
眠れぬ夜の小さなお話	原 由子	02(1998)
佐々木亜里美	人間生活学部 健康栄養学科	
感染症は世界を動かす	岡田晴恵	2010
佐藤恵美子	生活科学科 食物栄養専攻（短大）／人間生活学部 健康栄養学科	
おいしさの科学	山口静子・山野善正編	01(1997)
いま蘇る味の世界 東佐訢子の人とことば	林定子・川端晶子編	01(1997)
典座教訓 赴粥飯法	平野正章訳	02(1998)
マイナスイオン生活のすすめ	菅原晶子	07(2003)
3 食食べてきれいにやせる	菅原明子	08(2004)
素材を生かした新・ふるさとの味	(社) 日本栄養士会 全国地域活動栄養士協議会編	08(2004)
開けごまクッキング	岩崎園江	08(2004)
がんと向き合って	上野創	12(2008)

佐藤拓也	生活科学科 生活福祉専攻 (短大)	
ファストフードが世界を食いつくす	エリック・シュローサー 榎井浩一訳	06(2002)
子どもの危機をどう見るか	尾木直樹	06(2002)
非ユークリッド幾何の世界——幾何学の原点をさぐる——	寺阪英孝	09(2005)
戦争と有事法制	小池政行	09(2005)
佐藤英志	英文学科 (短大) / 国際地域学部	
自分の中に奇跡を起こす!	ウェイン・W・ダイアー	01(1997)
知的複眼思考法	苅谷 剛彦	02(1998)
渋谷崇行	幼児教育学科 (短大) / 人間生活学部 子ども学科	
言いたいことがきちんと伝わる 50 のレッスン	平木典子	10(2006)
塩狩峠	三浦綾子	10(2006)
「生きがい」とは何か 自己実現へのみち	小林 司	2010
渋谷義彦	英文学科 (短大) / 国際地域学部	
ソフィーの世界	ヨースタイン・ゴルデル	01(1997)
アルジェノンに花束を	ダニエル キイス	04(2000)
ベリクリーズ	ウィリアム・シェイクスピア	12(2008)
物語 イギリス人	小林章夫	2010
悩む力	姜尚中 (Kang Sang-jung)	2011
ケースで学ぶ異文化コミュニケーション—誤解・失敗・すれ違い—	久米昭元・長谷川典子	2012
ガリバー旅行記	ジョナサン・スウィフト作 平井正穂訳	2013
演劇入門	平田オリザ	2019
島崎敬子	生活科学科 生活福祉専攻 (短大) / 人間生活学部 子ども学科	
自分を好きになる本	パット・バルマー	01(1997)
差別を見抜く眼	今野敏彦	01(1997)
死ぬ瞬間	E・キューブラー・ロス	01(1997)
人生の親戚	大江健三郎	01(1997)
出生前診断	佐藤 孝道	05(2001)
島津光夫	学長 (短大)	
豊かさとは何か	暉峻淑子	01(1997)
「風と共に去りぬ」のアメリカ	青木富貴子	01(1997)
考古学の散歩道	田中琢・佐原真	01(1997)
高学歴時代の女性	利谷信義他編	01(1997)

城山正幸	国際教養学科 (短大)	
コモン・センス	トマス・ペイン	01(1997)
権利のための闘争	イーリング	01(1997)
法女性学への招待	山下他	01(1997)
権利のための闘争	イーリング著 村上淳一 (新) 訳	02(1998)
コモン・センス	トマス・ペイン著 小松春雄訳	02(1998)
鈴木裕行	生活科学科 食物栄養専攻 (短大)	
食材の常識が変わる本-別冊宝島 436-	別冊宝島編集部	04(2000)
日本人とユダヤ人	イザヤ・ベンダサン (山本七平)	04(2000)
五分後の世界	村上 龍	04(2000)
曽根英行	生活科学科 食物栄養専攻 (短大) / 人間生活学部 健康栄養学科	
ケインとアベル (上下)	ジェフリー・アーチャ	11(2007)
高久由美	国際教養学科 (短大) /国際地域学部	
中国文明の成立	松丸道雄・永田英正	02(1998)
文字の文化史	藤枝晃	03(1999)
李陵・山月記	中島 敦	05(2001)
食の文化史	大塚 滋	06(2002)
高端正幸	国際地域学部	
働くって何だー30のアドバイスー	森清	2010
日本辺境論	内田樹	2013
田中景	国際教養学科 (短大)	
クオ ヴァディス (上・中・下)	シエンキェヴィチ、河野与一訳	09(2005)
悲しみよこんにちは	フランソワーズ・サガン、朝吹登水子訳	09(2005)
身体感覚を取り戻すー腰・ハラ文化の再生ー	斎藤 孝	09(2005)
ハツカネズミと人間	ジョン・スタインベック	11(2007)
「辺境」の抵抗ー核廃棄物とアメリカ先住民の社会運動	鎌田遵	11(2007)
その名にちなんで	ジュンパ・ラヒリ	12(2008)
存在の耐えられない軽さ	ミラン・クンデラ	12(2008)
茅野潤一郎	英文学科 (短大) /国際地域学部	
あるジャム屋の話 (短編集「夢の果て」に収録)	安房直子	2010
鶴巻悦子	図書館司書	
嘘つきアーニヤの真っ赤な真実	米原万里	11(2007)
不実な美女か貞淑な醜女(ブス)か	米原万里	11(2007)

打ちのめされるようなすごい本	米原万里	11(2007)
カラマーゾフの兄弟 (1～5)	ドストエフスキー	12(2008)
21世紀 ドストエフスキーがやってくる	大江健三郎ほか	12(2008)
ベトナム 凜と一大石芳野写真集	大石芳野	2010
輝ける闇	開高健	2010
エルンスト・バルラハドイツ表現主義の彫刻家	京都国立近代美術館ほか監修	2010
最終目的地	ピーター・キャメロン	2010
フランク・ドールトン	英文学科 (短大)	
黒い雨	井伏鱒二	03(1999)
Huckleberry Finn	Mark Twain	03(1999)
神との会話 1、2、3	Nealle Donald Walsh	05(2001)
徳橋二三男	生活科学科 生活福祉専攻 (短大)	
高村光太郎のフェミニズム	駒沢喜美	02(1998)
戸潤幸夫	幼児教育学科 (短大) / 人間生活学部 子ども学科	
巨匠に教わる絵画の見かた	早坂優子	09(2005)
名画に教わる名画の見かた	早坂優子	09(2005)
幼児の造形 ワークショップ 3基本と展開	東山明	10(2006)
世界芸術家辞典	世界芸術家辞典事業部	10(2006)
美術館で愛を語る	岩淵潤子	11(2007)
フェルメール全点踏破の旅	朽木ゆり子	11(2007)
イメージの力	ルネ・ユイグ	12(2008)
宮大工千年の知恵	松浦昭次	12(2008)
子どもが育つ魔法の言葉	ドロシー・ロー・ノルト レイチャル・ハリス	2010
プーおじさんの子育て入門	柿田友広作 相沢康夫絵	2010
中澤孝之	国際教養学科 (短大)	
帝国解体前後	枝村 純郎	02(1998)
ゴルバチョフ回想録 (上・下)	M.ゴルバチョフ	02(1998)
クレムリン秘密文書は語る	名越健郎	03(1999)
ロシア国籍日本人の記録	川越史郎	03(1999)
日ソ戦争への道	B.スラヴィンスキー	04(2000)
盗まれた夢	A.マリーニナ	04(2000)
野本洋平	生活科学科 生活科学専攻 (短大) / 国際地域学部	
神去なあなあ日常	三浦 しをん	2010

波田野節子	国際教養学科（短大）／国際地域学部	
ベルサイユのばら（コミック）	池田理代子	01(1997)
フーシェ革命暦Ⅰ・Ⅱ	辻邦生	01(1997)
フランス革命下の一市民の日記	セレスタン・ギタール	01(1997)
アジアの都市と建築	加藤祐三	02(1998)
朝鮮王朝実録	朴永圭・神田聡他訳	02(1998)
朝鮮の詩心－「時調（しじょ）」の世界－	尹学準（ルビ・ユンハクチュン）	03(1999)
十九歳の東京日記	周恩来/矢吹晋編	05(2001)
ソウルの風景 —記憶と変貌—	四方田犬彦	06(2002)
原野明子	幼児教育学科（短大）	
ヒトはなぜ子育てに悩むのか	正高信男	02(1998)
子どもは小さな哲学者	G.B.マシューズ著 鈴木晶訳	02(1998)
天才たちは学校がきらいだった	トマス・G・ウェスト著 久志本克己訳	02(1998)
イタリア古寺巡礼	和辻哲郎	02(1998)
システーナのミケランジェロ	青木 昭	02(1998)
イソップ寓話集		03(1999)
江戸の親子～父親が子どもを育てた時代～	太田素子	03(1999)
0歳児がことばを獲得するとき	正高信男	04(2000)
幼児の笑いと発達	友定啓子	04(2000)
イメージを読む－美術史入門－	若桑みどり	04(2000)
月出皎司	国際教養学科（短大）	
国際感覚ってなんだろう	渡部 淳	06(2002)
ロシアについて 北方の原形	司馬遼太郎	07(2003)
福嶋秩子	英文学科（短大）／国際地域学部／ 副学長／副理事長	
日本語と女	寿岳章子	01(1997)
日本語はおもしろい	柴田武	01(1997)
日本の方言	柴田武	01(1997)
希望のヒロシマ	平岡孜	01(1997)
ホビットーゆきてかえりし物語	J・R・R・トールキン	02(1998)
日本語ウォッチング	井上史雄	02(1998)
言葉は社会を変えられる 21世紀の多文化共生社会に向けて	宇佐美まゆみ編著	02(1998)
アンネの日記 完全版		03(1999)
アンネ・フランクの記憶	小川洋子	03(1999)

大阪ことば学	尾上圭介	04(2000)
敬語はこわくない 最新用例と基礎知識	井上史雄	04(2000)
1945年のクリスマス 日本国憲法に「男女平等」を書いた女性の自伝	ベアテ・シロタ・ゴードン	05(2001)
異文化理解	青木 保	06(2002)
戦争責任とは何か―清算されなかったドイツの過去	木佐 芳男	06(2002)
英語を学ぶなら、こんなふうな考え方と対話の技法	加藤恭子	07(2003)
手話ということば もう一つの日本の言語	米川明彦	07(2003)
教えることの復権	大村はま/苅谷剛彦・夏子	08(2004)
当事者主権	中西正司・上野千鶴子	08(2004)
英文法の疑問 恥ずかしくてずっと聞けなかったこと	大津由紀雄	09(2005)
問題な日本語	北原保雄編	09(2005)
物は言いよう	斎藤美奈子	09(2005)
オニババ化する女たち 女性の身体性を取り戻す	三砂ちづる	09(2005)
続弾！ 問題な日本語	北原保雄編著	10(2006)
わかったつもり 読解力がつかない本当の原因	西林克彦	10(2006)
スタイルズ荘の怪事件	アガサ・クリスティ	11(2007)
ねずみとり	アガサ・クリスティ	11(2007)
知らないと恥ずかしい ジェンダー入門	加藤秀一	11(2007)
東京タワー オカンとボクと、時々オトン	リリー・フランキー	12(2008)
手紙	東野圭吾	12(2008)
日本人の知らない日本語	蛇蔵&海野凧子	2010
日本語という外国語	荒川洋平	2010
外国人と一緒に生きる社会がやってきた！ 多言語・多文化・多民族の時代へ	河原俊昭・山本忠行編	2011
複数の日本語 方言からはじめる言語学	工藤真由美・八亀裕美	2011
国際共通語としての英語	鳥飼玖美子	2012
「お笑い」日本語革命	松本修	2012
日本語教室	井上ひさし	2012
井上ひさしの日本語相談	井上ひさし	2012
日本人のための日本語文法入門	原沢伊都夫	2013
ものの言いかた西東	小林隆・澤村美幸	2016
日本国憲法を生んだ密室の九日間	鈴木昭典	2016
比較のなかの改憲論－日本国憲法の位置	辻村みよ子	2016

The Girl with the White Flag: A spellbinding account of love and courage in wartime Okinawa.	Tomiko Higa.	2016
Looking Like the Enemy: My Story of Imprisonment in Japanese-American Internment Camps.	Mary Matsuda Gruenewald.	2016
我輩は猫である	夏目漱石	2017
漱石の思い出	夏目鏡子述・松岡譲筆録	2017
ちいさい言語学者の冒険 子どもに学ぶことばの秘密	広瀬有紀	2018
ミッドナイト・バス	伊吹有喜	2018
津波の霊たち 3・11 死と生の物語	リチャード ロイド バリー	2019
カササギ殺人事件 上・下	アンソニー・ホロヴィッツ	2021
女の子はどう生きるか 教えて、上野先生！	上野千鶴子	2021
英語独習法	今井むつみ	2021
英文法再入門 10のハードルの飛び越え方	澤井康佑	2021

福本圭介

英文学科(短大) / 国際地域学部

怒りの方法	辛淑玉	10(2006)
暴力の哲学	酒井隆史	10(2006)
死にいたる病	セーレン・キルケゴール	10(2006)
無産大衆神髄	矢部史郎、山の手緑	10(2006)
坂口安吾全集 (14) (15)	坂口安吾	10(2006)
路上	ジャック・ケルアック	12(2008)
善の研究	西田幾多郎	12(2008)
新釈尊物語	ひろさちや	2010
沖縄のそばと食堂'05~'06	編集、発行人：大野益弘	2012
麺通団のさめきょうどんのめぐり方	田尾和俊	2012
原発と憲法9条	小出裕章	2013
海はひとの母である—沖縄金武湾から	安里清信	2013
真の独立への道 (ヒンド・スワラージ)	M. K. ガーンディー (田中敏雄訳)	2013
墮落論 / 日本文化私観 他二十二篇	坂口安吾	2013
命こそ宝：沖縄反戦の心	阿波根昌鴻	2016
苦海浄土：わが水俣病	石牟礼道子	2016
ネルソンさん、あなたは人を殺しましたか？：ベトナム帰還兵が語る「ほんとうの戦争」	アレン・ネルソン	2016
日本は、本当に平和憲法を捨てるのですか？	C・ダグラス・ラミス	2016
野火	大岡昇平	2016

うつろうもの のこるもの	編集・企画・発行：Bricole（楳沢和典・楳沢厚子）	2017
ウシがゆくー植民地主義を探検し、私をさがす旅	知念ウシ	2017
シランフナーの暴力ー知念ウシ政治発言集	知念ウシ	2017
ひまなこなべ	文・萱野茂	2019
花ばあば	絵と文・クオン・ユンドク	2019
藤井誠二	国際地域学部／国際経済学部	
ヤバい経済学	スティーヴン・レヴィット、スティーヴン・ダブナー	2011
日本経済を学ぶ	岩田規久男	2011
藤本直生	SALC メンター	
The Naked Chef	Jamie Oliver	2012
フジモト先生のビューティフル★アメリカ ～Some Stories in Missouri～	藤本 直生	2013
Howard Brown	国際地域学部	
The Omnivore's Dilemma	Michael Pollan	2011
雑食動物のジレンマ（上下）——ある 4 つの食事の自然史	マイケル・ポーラン	2011
「達人」の英語学習法ーデータが語る効果的な外国語習得法とは	竹内 理	2017
宇宙飛行士が教える地球の歩き	クリス・ハドフィールド	2017
An Astronaut's Guide to Life on Earth	Chris Hadfield	2017
わたしを宇宙に連れてってー無重力生活への挑戦	メアリー・ローチ	2017
Packing for Mars: The Curious Science of Life in the Void	Mary Roach	2017
The Handmaid's Tale（侍女の物語）	Margaret Atwood	2019
堀江薫	国際教養学科（短大）／国際地域学部	
憲法と国家ー同時代を問うー	樋口 陽一	04(2000)
フェルマーの大定理が解けた！	足立 恒雄	04(2000)
地球環境報告Ⅱ	石 弘之	05(2001)
権威と権力	なだいなだ	06(2002)
偽原始人	井上ひさし	2011
吉里吉里人（上中下）	井上ひさし	2011
わが青春に悔いあり	遠藤周作	2013
キヨミズ准教授の法学入門	木村草太	2016
放射線被曝の理科・社会 四年目の「福島の実」	児玉一八・清水修二・野口邦和	2016
いちから聞きたい放射線のほんとう いま知っておきたい 2 2 の話	菊池誠・小峰公子	2016

地球進化 46 億年の物語 「青い惑星」はいかにしてできたのか	ロバート・ヘイゼン	2017
寺田寅彦随筆集 第二巻		2018
坊ちゃん	夏目漱石	2021
本間善夫	生活科学科 生活科学専攻（短大）／国際地域学部	
アルケミスト—夢を旅した少年	P・コエーリヨ	01(1997)
奪われし未来	Theo Colborn, John Peterson, Myers and Dianne Dumanoski	02(1998)
愛華、光の中へ	坪田愛華・陽子	02(1998)
われ笑う、ゆえにわれあり	土屋賢二	03(1999)
エコロジー的思想のすすめ	立花隆	03(1999)
不安の世紀から	辺見庸	03(1999)
反逆する風景	辺見庸	03(1999)
ソウの時間 ネズミの時間	本川達雄	03(1999)
金属は人体になぜ必要か	桜井弘	03(1999)
物理定数とは何か	西條敏美	03(1999)
南の島のティオ	池澤夏樹	03(1999)
市民科学者として生きる	高木仁三郎	04(2000)
松木真言	幼児教育学科（短大）	
アクティブ・マインド—人間は動きの中で考える	佐伯胖・佐々木正人編	01(1997)
三国志	吉川英治	02(1998)
こころとからだ	五木寛之	02(1998)
水上則子	国際教養学科（短大）／国際地域学部	
もの食う人びと	辺見庸	01(1997)
女性画家列伝	若桑みどり	01(1997)
ソラリスの陽のもとに	スタニスワフ・レム	01(1997)
一世紀より長い一日	アイトマートフ	01(1997)
かわいい女・犬を連れた奥さん	アントン・チーホフ著 小笠原豊樹訳	02(1998)
マルテの手記	リルケ	02(1998)
聡明な女は料理がうまい	桐島 洋子	02(1998)
火車	宮部 みゆき	02(1998)
みみをすます	谷川 俊太郎	02(1998)
われら	ザミヤーチン	03(1999)
世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド	村上春樹	03(1999)
遠景のロシア 歴史と民俗の旅	中村 喜和	04(2000)

丸亀日記	藤原新也	04(2000)
ダーシェンカ	カレル・チャペック	04(2000)
収容所から来た遺書	辺見じゅん	05(2001)
窯変 源氏物語 (1～14)	橋本治	05(2001)
女たちのジハード	篠田節子	06(2002)
ゲイルズバーグの春を愛す	ジャック・フィニ	06(2002)
アンダーグラウンド	村上春樹	06(2002)
二十歳のころ	立花隆	06(2002)
星の王子さま	サン・テグジュペリ	06(2002)
遠い朝の本たち	須賀 敦子	06(2002)
思考のレッスン	丸谷オ一	07(2003)
お姫様とジェンダー	若桑みどり	08(2004)
西の魔女が死んだ	梨木香歩	08(2004)
女帝のロシア	小野理子	09(2005)
痛快！コンピュータ学	坂村 健	09(2005)
博士の愛した数式	小川洋子	10(2006)
祖国とは国語	藤原正彦	10(2006)
絵本を抱えて 部屋のすみへ	江國香織	10(2006)
恋文 女帝エカテリーナ二世 発見された千百六十二通の手紙	小野理子, 山口智子	11(2007)
戦争と平和 (一～四)	トルストイ	12(2008)
世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド	村上春樹	12(2008)
ある愛の歴史	ジェフリー・アーチャー	12(2008)
自由をつくる 自在に生きる	森博嗣	2010
わたしを離さないで	カズオ・イシグロ	2010
外国語上達法	千野栄一	2010
聡明な女は料理がうまい	桐島洋子	2010
語学で身を立てる	猪浦道夫	2011
街場のメディア論	内田樹	2011
ハラショーな日々 のんきなロシア人の夫・ワーニヤとの暮らし	イワノワ・ケイコ	2011
見て見ぬふりをする社会	マーガレット・ヘファーナン	2012
家庭で作れるロシア料理	料理・荻野恭子 エッセイ・沼野恭子	2012
文人悪食	嵐山光三郎	2012
ぬくもり雑貨いっぱいのロシアへ(旅のヒント BOOK)	花井景子	2013

カナカナのかわいいロシアに出会う旅	井岡美保	2013
突然ノックの音が	エトガル・クレット	2016
死ぬまでに決断しておきたいこと 20	大津 秀一	2016
献灯使	多和田 葉子	2016
帰還兵はなぜ自殺するのか	デイヴィッド・フィンケル	2016
天国でまた会おう	ビエール・ルメートル	2017
R 帝国	中村文則	2018
夜廻り猫	深谷かほる	2018
地球にちりばめられて	多和田葉子	2019
マトリョーシカちゃん	ヴェ・ヴィクトロフ 原作 / イ・ペロポリスカ ヤ 原作 / 加古 里子 文・絵	2019
もみのき そのみを かざりなさい	五味太郎	2019
100 まんびきのねこ	ワンダ・ガアグ	2019
クレーの天使	谷川俊太郎	2019
雪の練習生	多和田葉子	2021

三宅登之

国際教養学科 (短大)

日本語の意味 英語の意味

小島義郎

01(1997)

宮西邦夫

生活科学科 食物栄養専攻 (短大) /
人間生活学部 健康栄養学科

味覚障害とダイエット 「知られざる国民病」の処方箋

富田寛

07(2003)

怖い体脂肪をどう減らすか

片岡邦三

08(2004)

病気になるない生き方 ミラクルエンザイムが寿命を決める

新谷弘美

10(2006)

なぜ「粗食」が体にいいのか

常津良一、幕内秀夫

10(2006)

太りゆく人類－肥満社会と過食社会－

エレン・ラベル・シエル

2010

飢餓の世紀－食料不足と人口爆発が世界を襲う－

レスター・R・ブラウン ハル・ケイン

2010

胃腸は語る－胃相、腸相からみた健康・長寿法

新谷弘美

2010

Stuffed and Starved 肥満と飢餓 世界フード・ビジネスの不幸のシステム

ラジ・パテル

2011

科学が証明する新朝食のすすめ

女子栄養大学副学長自治医科大学名
誉教授 香川靖雄

2011

なぜ「牛乳」は体に悪いのか 医学会の権威が明かす、牛乳の健康被害

フランク・オスキー

2011

がん再発を防ぐ「完全食」

済陽高穂

2011

WHO をゆく 感染症との闘いを超えて

尾身 茂

2013

Anti cancer A New Way of Life

David Servan-Schreiber, MD,
PhD

2013

102歳のロビンソン・クルーソ	渡久地政瀧	2013
アフリカ 赤道編 スーダンからザイールまで	船尾 修	2013
アフリカ 南部編 南アフリカからコモロまで	船尾 修	2013
村松芳多子	生活科学科 食物栄養専攻（短大）／ 人間生活学部 健康栄養学科	
こども論語塾	安岡定子著, 田部井文雄監修	2010
こども論語塾 その2	安岡定子著, 田部井文雄監修	2010
こども論語塾 その3	安岡定子著, 田部井文雄監修	2010
働く。社会で羽ばたくあなたへ	日野原重明	2011
別冊 Newton 知って楽しい身近な? (だれかに 教えたい科学の不思議 36)	水谷仁編集	2011
正しいパンツのたたみ方	南野忠治	2012
日本人の9割に英語はいらない	成毛眞	2012
「裏日本」文化ルネッサンス	NPO 法人 頸城野郷土資料室 編 (石塚正英・唐澤太輔・工藤豊・石川 伊織 著)	2012
食堂かたつむり	小川糸	2012
シネマ食堂	飯島奈美	2012
「浜村渚の計算ノート」シリーズ	青柳碧人	2013
置かれた場所で咲きなさい	渡辺和子	2013
グローバル・エシックスを考える	寺田俊郎・舟場保之 編著	2013
採用基準	伊賀泰代	2013
村屋勲夫	国際教養学科（短大）	
世界の歴史（全16巻）		01(1997)
ルーツ（上・中・下）	アレックス・ヘイリー	01(1997)
軍国日本の興亡	猪木正道	01(1997)
アメリカ精神の源	ハロラン・芙美子	03(1999)
日米関係の経済史	原田泰	03(1999)
円とドル	吉野 俊彦	04(2000)
不思議の国 アメリカ	松尾 弑之	04(2000)
無意識の構造	河合隼雄	05(2001)
ベーシック アメリカ経済入門 新版	原田和明	05(2001)
アメリカとアメリカ人	ジョン・スタインバック	08(2004)
森川英明	生活科学科 生活科学専攻（短大）	
深夜特急 1～6	沢木耕太郎	01(1997)
猿の食べのこし	中島らも	01(1997)

エエカゲンが面白い	森毅	01(1997)
レポートの組み立て方	木下是雄	01(1997)
実践 言語技術入門	言語技術の会	01(1997)
若き数学者のアメリカ	藤原正彦	01(1997)
柳町裕子	国際教養学科(短大) / 国際地域学部	
外国人が日本語教師によくする100の質問	酒入郁子ほか	02(1998)
女には向かない職業	P.D.ジエイムズ	02(1998)
〈性〉のミステリー	伏見憲明	03(1999)
よみがえるロシア	五木寛之	03(1999)
あらゆる信念	ライア・マテラ	03(1999)
異性愛をめぐる対話	伊藤悟 & 築瀬竜太	04(2000)
巨匠とマルガリータ(上)(下)	ミハイル・ブルガーコフ	05(2001)
アンナブキンの社会史	小野清美	05(2001)
外国語の水曜日(学習法としての言語学入門)	黒田龍之助	05(2001)
日本語練習帳	大野 晋	05(2001)
歴史を考えるヒント	網野善彦	06(2002)
ピーコ伝/ピーコこと杉浦克昭	聞き手・糸井重里	06(2002)
悪童日記	アゴタ・クリストフ 堀茂樹訳	06(2002)
魔女狩り	森島恒雄	06(2002)
ユダヤ人	J.P.サルトル	06(2002)
同性愛・多様なセクシュアリティ/人権と共生を学ぶ授業	“人間と性”教育研究所【編】	07(2003)
変身	カフカ	07(2003)
トニオ・クレエゲル	トーマス・マン 実吉捷郎【訳】	07(2003)
白夜	ドストエフスキー 小沼文彦【訳】	07(2003)
外套	ゴーゴリ 平井肇【訳】	07(2003)
サロメ	オスカー・ワイルド 福田恒存【訳】	07(2003)
ジーキル博士とハイド氏	スティーヴンソン 大谷利彦【訳】	07(2003)
絵のない絵本	アンデルセン 山野辺五十鈴【訳】	07(2003)
日本の名詩を読みかえず	高橋順子編	09(2005)
汚れつちまつた悲しみに……/中原中也詩集	中原中也	09(2005)
プエノス・ディアス、ニッポン〜外国人が生きる「もうひとつのニッポン」	ななころびやおき	10(2006)
トマシーナ	ポール・ギャリコ	10(2006)
新編銀河鉄道の夜	宮沢 賢治	11(2007)

ポッコちゃん	星 新一	11(2007)
はい、こちら国立天文台―星空の電話相談室	長沢 工	11(2007)
ねじの回転	ヘンリー・ジェイムズ	11(2007)
字幕屋は銀幕の片隅で日本語が変だと叫ぶ	太田直子	12(2008)
ベン	引間徹	12(2008)
鴨川ホルモー	万城目 学	2010
イメージを読む―美術史入門	若桑 みどり	2010
新訳チェーホフ短篇集	チェーホフ	2011
現代言語論―ソシュール、フロイト、ウイトゲンシュタイン	立川健二、山田広昭	2011
きみの友だち	重松 清	2011
ペンギンの憂鬱	アンドレイ・クルコフ	2018
とりばん	とりのなんこ	2018
あおくときいろちゃん	レオ・レオーニ作	2019
エスターハージー王子の冒険	イレーネ・ディーシ&ハンス・マグヌス・エンツェンスベルガー	2019
山岸明浩	生活科学科 生活科学専攻（短大）	
快適環境の科学	大野秀夫・堀越哲美・久野寛・土川忠浩・松原斎樹・伊藤尚寛	02(1998)
養老孟司の〈逆さメガネ〉	養老孟司	08(2004)
山田雅子	生活科学科 食物栄養専攻（短大）	
知の技法	小林康夫・船曳建夫編	01(1997)
腸は考える	藤田恒夫	01(1997)
ブレインサイエンス・シリーズ2（脳の老化）	大村裕・中川八郎編	01(1997)
山田佳子	国際教養学科（短大）／国際地域学部	
半島へ、ふたたび	蓮池 薫	2010
ショパン-花束の中に隠された大砲	崔 善愛	2011
楽しい私の家	孔 枝泳	2011
お父さんとオジさん	伊集院 静	2011
デフ・ヴォイス	丸山正樹	2012
耳の聞こえない私が4カ国語しゃべれる理由	金修琳	2012
聴衆の誕生―ポスト・モダン時代の音楽文化	渡辺裕	2013
「声」の資本主義―電話・ラジオ・蓄音機の社会史	吉見俊哉	2013
遠い太鼓	村上春樹	2013

山中知彦		国際地域学部／国際経済学部
在日	姜 尚中	2010
デミアン	ヘルマン・ヘッセ	2010
新版 グローバリゼーション	マンフレッド・B・ステイーガー	2011
北越雪譜	鈴木牧之	2011
震災トラウマと復興ストレス	宮地尚子	2012
スコッチへの旅	平澤正夫	2012
もし僕らのことばがウイスキーであったなら	村上春樹	2012
カラー版 極上の純米酒ガイド	上原浩監修	2012
Unbeaten Tracks in Japan	Isabella L. Bird	2013
日本奥地紀行	イザベラ・バード	2013
全東洋街道(上・下)	藤原 新也	2013
地球の住まい方見聞録	山中知彦	2016
もどれない故郷（ふるさと）ながどろー飯館村帰還困難区域の記憶—	長泥記録誌編集委員会編	2016
それでも飯館村はそこにある—村出身記者が見つめた故郷の5年	大渡美咲	2016
原発避難と創発的支援:活かされた中越の災害対応経験	高橋若菜編著;田口卓臣,松井克浩著	2017
お母さんを支えつづけたい:原発避難と新潟の地域社会	高橋若菜,田口卓臣編	2017
宇宙船地球号操縦マニュアル	バックミンスター・フラワー	2017
旅する音楽	仲野麻紀	2018
山根麻紀		国際教養学科（短大）
クオ・ワディス（全3巻）	ヘンリック・シエンキェヴィチ	04(2000)
愛するということ	エーリッヒ・フロム	04(2000)
若月章		国際教養学科（短大）／国際地域学部
女たちのアジア	松井やより	01(1997)
女たちがつくるアジア	松井やより	01(1997)
国際感覚ってなんだろう	渡部淳	01(1997)
在日外国人 新版——法の壁・心の溝	田中宏	01(1997)
同盟を考える	船橋洋一	03(1999)
地球環境報告 II	石 弘之	03(1999)
裏日本	古厩 忠夫	05(2001)
ことばと文化	鈴木孝夫	2011
世界システム論講義—ヨーロッパと近代世界—	川北稔	2018

高坂正堯－戦後日本の現実主義－	服部隆二	2019
渡辺しのぶ	図書館司書	
ダーシェンカ	カレル・チャペック	2011
渡辺淑子	国際教養学科（短大）	
ヴェニスの人	シェイクスピア作・小田島雄志訳	01(1997)
夏の夜の夢	シェイクスピア作・小田島雄志訳	01(1997)
ロミオとジュリエット	シェイクスピア作・小田島雄志訳	01(1997)
リヤ王	シェイクスピア作・小田島雄志訳	01(1997)
ハムレット	シェイクスピア	02(1998)
漢詩入門	一海知義	03(1999)
渡邊令子	生活科学科 食物栄養専攻（短大） / 人間生活学部 健康栄養学科	
奇跡のリンゴ「絶対不可能」を覆した農家 木村秋則の記録	石川拓治	2010
京大人気講義シリーズ「生体リズムと健康」	若村智子	2010

2021 年度卒業・2022 年度入学記念

どこでもドアのかぎ 2022

新潟県立大学生生活協同組合

教職員フォーラム 「どこでもドアのかぎ」編集委員会 編

バックナンバーURL:<http://www.unii.ac.jp/~ktcoop/dokodemo.html>

表紙イラスト

福嶋恵（第9号） 米山万里子（2013）

菅又さつき（2016） 仲佐梨奈（2019）

2022年3月14日 発行